
モンスターハンター = 狩人の心得 =

怠惰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター Ⅱ 狩人の心得 Ⅱ

【Nコード】

N0229D

【作者名】

怠惰

【あらすじ】

右も左も分らない、という表現がぴったりの新米ハンター・アーク。彼が最初の仕事で向かった村には、もう一人のハンターの姿があった。薄紅色に身を包む彼女が、この村に来たその理由は……？【知らない人から経験者まで、誰もが楽しめるような作品を目指して書いてみました。宜しければご一読下さい。】

1 Prologue

手付かずのままの大自然が地上の大半を覆う世界。雄大なその恵みに抱かれ、動植物は独自の発展を遂げていった。

大人の背丈ほどもあるうかという猪、砂の中を泳ぐ魚、そして鱗に覆われた頑強な体躯と翼を持ち、大空を翔ける巨大な竜

人類はそれらとの共存の道を模索したが、両者の関係は侵略する者とされる者という範囲から外れることはなかった。

人に比べて桁外れに強大な彼らに対抗するため、人は頑強な肉体と不屈の精神、そして巨大な武器を軽々と扱う卓越した技術を身につけた。

彼らは人々の暮らしを守るためにモンスターを狩るだけではなく、様々な用途に利用できるその体の一部を持ち帰り、珍しい植物や魚、鉱物を採集しては人々に分け与えた。

彼らは集落を守護し、恩恵をもたらし、生死を賭けて狩猟の中に生きる者。

人は畏敬の念と共に彼らをこう呼ぶ 『ハンター』と！

これは、とある村に駐在する一人の新米ハンターの青年と、薄紅色の乙女の物語

1 Prologue (後書き)

そこは誰も知らない世界。

そこは誰もが夢見た世界。

どこまでも続く大森林に、突き抜けるような青い空。

一切の生者を拒む活火山に、死と静寂が支配する大雪山。

誰もが必死で、それ故に美しい。

さあ、高らかに嘔おう。今日という日に感謝しよう。

君達を、この地を訪れた君達を私は諸手を上げて歓迎しよう。

『モンスターハンターの世界へようこそ!』

願わくば、この出会いが長く続く楽しき日々のきっかけとならんことを……

2 星の下、酒場にて

ハンター急募！ 南の密林の側に新たな村を作るので、その間の周辺警備とモンスターの討伐をお願いします。期間未定・住居完備・報酬応相談。

訓練所の側、訓練生の軽鎧を身に纏っていた頃は足を運ぶことが出来なかった小さな酒場でそんな求人張り紙を見た時に、俺の最初の仕事は決定した。

その周辺にはたいしたモンスターの出没情報も無かったし、何より元手が殆ど無い今の状況で家賃がタダというのが大きかった。

そうして僅かな路銀と片手剣を携え、意気揚々と村に向かったはいものの、そうして着いた場所は思った以上に面倒な土地だった。家は材木を組んだだけの掘っ建て小屋のような簡素な物ばかりで、住む人々は殆どが村作りに関わる職人や商人。

村を囲う防護柵がまだ未完成の為毎日のようにケルピやモスなどの獣が入り込み、時には猛猪ファンゴの群が突っ込んできて村中が騒然とすることもあった。

そんな中で俺は日々村の周囲に出没するランポスなどの肉食獣を地道に狩り続け、時には村人からの依頼をこなしながら、なんとか季節が一巡りするまでをやりぬいた。

「大分この村も賑やかになったね」

大剣を背負って一人酒場で飲み明かしていた俺の前、突然現れて確

認め取らずに同じテーブル　といつても、大きなタルに布を被せただけの簡素なものだが　の対面に座った女が、手に持つ皿に盛られた生のホワイトレバーをつまみながら呟く。

高く結い上げた青みがかった長い銀髪に、僅かに日に焼けた白い肌。化粧などは一切していないが、整った目鼻立ちはそれだけで男の目を引き付ける魅力を放っている。

「最近、また新しい商人が来たらしいよ。とはいっても、扱ってるものは工芸品らしいからあたしたちにはあまり関係ないけど」

女が話している中、俺は黙々と焼いたオンプウオにかじりつき、杯に注がれたホピ酒をあおる。喉の灼ける感覚に思考が僅かに霞掛かる。

「ちょっとアंक、聞いてるの？」

その態度に気を悪くしたか、目の前の女が僅かに眉をひそめた。

「ほつといてくれ。俺は今機嫌が悪いんだ」

「……ああ、クエストに失敗したのね」

……人の気にしていたことをあつさりと言ってくれる。

「別にいいじゃない。誰にだってあることよ」

「……今更ドスランポス程度にやりこめられて、そんな気でいられるかよ」

「ありゃー、それはそれは……」

ドスランポスとは、青い鱗に覆われた皮膚と鋭い爪牙を持つ、人間の背丈ほどもある二足歩行の蜥蜴・ランポスの群を率いる親玉のようなモンスターである。

ぱつくりと裂けた口元から覗く鋭い牙が凶悪な印象を与えるが、実力的には力もタフネスもたいしたことはなく、ハンター間では駆け出しでも難無く倒せる程度の手軽な狩猟対象として認識されている。

「折角新しい大剣を試そうと思ったのによ……」

背負った大剣　バスターブレイドの柄を撫でながら、溜め息を一つ。

「いままで片手剣だったし、勝手が大分違うんじゃない？　まだ扱いに馴れてないんだよ」

「……お前はここに来てからずっとランスだよな」

「まあそうだけど……一通りやってみて、ランスに決めたのはそれからだよ。最初は間合いが分からなくてよくガジガジかじられてたけど」

あはは、と陽気な笑いと共に彼女が身につけている薄紅色の鎧が擦れて音を立てる。

彼女の上半身を覆う薄紅色の装備の数々は、その全てが大怪鳥イヤ

ンクツクの鱗から作り出されたもの。

イヤンクツクの狩猟は『初心者登竜門』とも呼ばれ、それに成功して初めていっぱしのハンターとして認められる、いわゆる試験石的な扱いのモンスターである。

しかし、装備一式を揃える程の量の鱗となれば、それこそ5、6頭は狩らなくてはならない。彼女の腕前は恐らく『いっぱし』で評される以上のものだろう。

また、足元を覆うのは桃毛獣コンガ、所構わず屁を放ちハンター間でも嫌われているゴリラのような容貌を持つモンスターの毛で作られたグリーブである。

つまり、蒼銀の髪を除けば上から下まで淡いピンクで統一されていることになる。

「とにかく、あまり気にすることないって。しばらく振り回してれば自然とコツが掴めてくるもんだよ」

皿一枚分のホワイトレバーを一人でぺろりと平らげ、彼女はこともなげに言う。自身の経験から来る台詞なのだろうが、自信を軽く失っている今ではあまり納得のいく解答ではない。

そう思っただけでまた物憂げに溜め息をついた俺を見かねたのか、彼女はまた別の解を出す。

「それじゃ、あたしが見てあげよっか？ どこが駄目なのか、さ」

「えっ？ いや、でも……分かるのか？」

「だいじょぶだって。あたし自身大剣の経験はあるし、昔ベテラン

の大剣使いの人とパーティー組んだこともあるしさ」

そんなのを比較対象にされても困るが、しかし悪い点が見つかるというのなら断る理由もない。ここは一つ、先輩の胸を借りるとしよう。

「それじゃまあ、頼む。ここではまずいいし、少し離れるか」

「ん、そだね。おーい、代金ココ置いとくよー！」

看板娘の陽気な声を背に、人気の無い場所を探して村の入口付近まで歩く。

「じゃ、とりあえず軽く振ってみるから、何かあったら遠慮なく言ってくれ」

はいよー、という返事を受け、肩から突き出た大剣の柄を掴み、振り下ろす。

ずん、と鈍い音を立てて刃が地面に食い込む。それから一息、深呼吸をしてから柄を両手で握り直し、切っ先を持ち上げる。

目の高さまでゆっくり上げると、一旦刃をぴたりと止めて間を作る。

「シィッ！」

そこから大きく剣を振り上げ、叩き付けの一撃。地面に激突すると同時に一歩踏み出し、刃を返すと共に梃子の要領で切っ先を素早く浮かせて切り上げる。

「　　っふうっ！」

切っ先は大きく弧を描き、先程とは逆側に落下。更に振り返るようにして体を横に大きく捻り、空を裂く横風ぎの一閃を繰り出す。そのような動作を20回ほど繰り返し返した所で、彼女から待てが掛かった。

慣れない獲物を力一杯振り回したせいで、大剣を仕舞った今も少し腕が痺れている。

「で、どうだ。何か分かったか？」

そう言っていると、彼女は僅かに困ったような素振りを見せ、

「いや、なんとも見事なものだけど。基本は正しく守ってるし、どこにも問題はなさそうだね」

などと言った。

それを聞いて相当アホな顔をしていたのだろう、返事も出来ずばけつと突っ立っていた俺に慌てて彼女は付け加える。

「あー、あれだ。多分、武器の扱いじゃなくて立ち回りの方に問題があるんじゃない？　こればかりは実戦をこなしながら覚えていかないとうちにもならないから」

「そうか……」

なら、しばらくは下手でもとにかくこいつで狩りをこなしていかなーいといけない訳だ。どれだけ時間がかかるか分からないが、これもまた経験……

と、前向きに考えようとした所で生活費の問題が脳裏に浮上。改造費や材料費諸々で手持ちの資金は……

「なあ、リエス……ランポスって鱗取って焼いたら美味いかな……」

「ちょっ、急にどうしたのアンク！ 正気に戻れっ！」

夜は静かに更けていく……

3 出発の朝

頭上から容赦無く照り付ける太陽は鎧に包まれた体をじりじりと焦がし、逃げ場の無い熱気が鎧と体との僅かな隙間に充満していく。見渡す限りに広がる砂と岩の世界。ゆらゆらと蜃気楼が浮かぶ、ただそこに居るだけで命が削られていくかのような環境下で、俺はいえ

「ほら、足を止めない！ 正面に立つたらまた牙が来るよ！」

「うつせ……！ こっちは全身鉄だから、重い上にクソ暑いんだよ！」

剣を振り回しながら悪態をついていた。

時間は一日前の朝まで遡る。

村の一面に用意された質素な住居の中、大剣をベッドの横に放り出してふて寝していると、がんと扉を叩く音が家の中に喧しく響いた。

「……空いてるぞー」

体を起こす気もせず、俯せに転がったまま抑揚の無い声を出す。昨日は無理して朝から晩まで大剣を振り回していた為、全身にけるい疲労が残っている。

やはり最軽量の得物である片手剣からいきなり大剣に変えたのは少し無謀だったか。細身の太刀ならもう少しましに扱えたかもしれない。

そんなことを考えていると、来訪者は扉を開けて遠慮なく家に入り込み、そのままかしゃかしゃ音を立てながらこちらへ……かしゃかしゃ？

足音にしては異様なその響きに嫌な予感がし、姿を確認しようと寝返りをうとうとした所で

「朝だー！ 起きろアंक！ モーニンツ！」

どぐらがしゃずーっ！

激しい音を立て、寝ていたベッドごと一気にひっくり返された。

「てめっ……リエス！ 何のつもりだ！ 喧嘩か！？ 買うぞ！？」

というか、ひっくり返すならせめてシートにしろ。そんな力技はハンターとはいえ女としてアレだ。

ベッドの下からなんとか這い出しながらがなりたてると、相変わらず薄紅色の装備に包まれたリエスは腰に手を当て、

「よし、目え覚めた？ それじゃ準備して、仕事取ってきたから」

相変わらずの人懐っこい笑顔を浮かべながらそう告げた。

「仕事って……ランポスとかならお前一人でなんとでもなるだろ」

「ああ、今回はそういうのじゃなくて、ちゃんとした討伐の依頼だから」

「ふうん……」

最近は数が減ったとはいえ、この未開の村で受ける仕事といえば大半が雑魚の退治や素材集めであり、大型モンスターの討伐というのはそれなりに珍しかった。

とはいえそれもやはり最弱の鳥竜であるドランポスや突っ走るしか能の無い大猪ドスファンゴ等の低ランクなものばかりで、最近ではたいした刺激にもなりはしないのだが。

「で、どのあたりだ？ 滝の辺りか、それともまた洞窟か？」

ようやくのことでベッドに挟まれた右足を引き抜き、鎧を納めた箱へと向かいながら尋ねる。

この村に来た当初、右も左も分からない新米ハンターだった頃はよ

くりエスと共に狩りに出掛けていた。

初めて大型モンスターを狩った時もそうだったし、大雨の中で無数のランポスやファンゴと二人並んで対峙したこともあった。

最近は俺も慣れてきたこともあって効率よく二手に分かれて別々に仕事をするようになったが、少し前までは本当にべったりとついて回っていたものだ。

そんなことを考えていると、リエスは少し楽しそうな声で目的地を告げる。

「砂漠」

「……は？」

「ここから西へ一日程行った所に砂漠があるでしょ？　そこに生息するドスゲネポスの狩猟が今回の目的」

「いいのか？　短期間とはいえ、村を離れることになるけど……」

それにリエスはだいじょぶだいじょぶ、と軽い口調で返事を返す。

「昨日、アंकが森の中にいた頃に流れのハンターが村に来てね。」

しばらくはここで足を休めるって言ってたから、ついでに警備も頼んどいた」

ついでにそんなもんを頼むな。休めないだろ、それ……受けるほうもあれだが。

と、愛用の鉄製防具、通称バトルシリーズを身に付けていたところ
でふと気がついた。

「リエス、なんかいつもと装備が違くないか？」

彩りとしては普段通りの薄紅色だが、今日は所々細かい意匠が異なっている。

「ああ、それはね。ほれっ」

と、リエルは右足を軸にくるりと反転し、背に固定した武器がこちらに見えるようにする。

普段は長大な槍が括り付けてあるその場所に、折り畳まれた弓が下がっていた。

「今回はアंकのサポートに回ろうと思って。早く大剣を扱えるようになったほうがいいでしょ？」

再び半回転して俺と向かい合ってからリエスはそう言った。

弓やボウガンを扱う際には、弓を引き絞る動作や弾丸のリロードの邪魔にならないよう、動きを阻害しない特殊な作りの鎧を付ける。また、中々遠距離が主な戦闘距離となるため、動作時に音を立てて気付かれないようにそれらの鎧はなるべく軽くなるよう作られている。

「ゲネポスは基本的にはランポスと大差ないから、こいつが狩ればランポスだって楽勝だって」

「……わざわざありがとな、リエス」

要は実戦の立ち回りを実地で手っ取り早く教えようということだろ

う。俺は素直に礼を言った。

「なあに、後輩の面倒を見るのは先輩の仕事だよっ」

あはつと軽やかな笑みを浮かべ、リエスは気にするなと手を振る。

「でも、まさか本当の理由はクソ暑い砂漠の中を重鎧なんか着ながら歩いてらないとかいう個人的な理由じゃないよな」

「おっと、麻痺ビンの用意を忘れたようだ」

「そこ、逃げるな」

そうして砂漠での活動に向けた準備を整えた後、俺達二人は村を出発したのだった。

4 熱砂の踏破

日中の灼熱地獄と化した砂漠に二人、モンスターの近付かない比較的安全な場所に張られたテントの下で改めて装備を確認し、どこまでも続く黄砂の領域へと足を踏み入れたのがほんの10数分前のこと。

遮蔽物が少なく見通しが良いとはいえ、広大な砂漠の中から一匹のターゲットを探し出すのは長期戦になるだろうと心構えをしていた所に、あっさりとその目標たるドスゲネポスが目の前を通り過ぎて岩場へと走り込んだのを目撃したのがついさっき。

そして現在、ドスゲネポスとその他大勢のゲネポス及び巨大羽虫ラングスタと刃を交えているというのだから、本当にあっという間の急展開である。

「っ だらああ！」

渾身の力を込めた振り下ろしの一撃はしかし、対象に食らい付く事なく柔らかな地面に深く突き刺さるのみ。

「だからー、力任せじゃだめだって！ すばしっこいんだから、隙をついて細かく一撃を当ててくようにしないと！」

そんな檄を飛ばしながら、リエスは手中の弓をきりりと引き絞り、

回りを取り囲むゲネポスの一匹を射る。

しゅん、と宙を疾った矢は正確にその首元を貫き、ゲネポスは流血を砂の上に散らしながら甲高い叫びを上げて倒れ伏す。

分担は俺がドスゲネポスを、リエスがその他の細かい雑魚の相手をすることに決めていた。

しかし、複数の肉食獣に狙われる中でリエスが次々とそれらを倒していく傍ら、俺はといえば未だにまともな一撃をいれることすら出来ていない。

そんな俺を嘲笑うかのように、俺の斬撃を一足飛びでかわしたドスゲネポスは鋭い牙の生え揃う大きな口を開き、天に向かって肌をびりびりと震わせるような咆哮を上げる。

そして、高く上げた頭を今度は一転して地面すれすれまで下げ、しなやかな筋肉に覆われた後ろ脚をぐうっと折り曲げる。

「ちいっ！」

俺が素早く横に飛び退くのと同時に巨体が高く宙を舞い、俺が先程まで立っていた場所を太い脚がえぐった。

見た目はランポスと大して変わらないが、ゲネポスの爪牙には即効性の麻痺毒が含まれており、下手に喰らえば身動き一つ取れなくなる。

そうなってしまうば、あとは抵抗一つ出来ずに早めのランチとなるだけだ。

「くそっ……厄介だな」

手をついて立ち上がり、大剣を構え直す。熱気に蒸れる兜の中に更

に砂が入り込み、汗に混ざって顔と擦れるのが凄まじく不快。
ギシャア！ と耳をつんざく叫びを上げながら振り下ろされた前脚
を、大剣の分厚い腹で受け止めた。

「くっ、ぬ、おらあっ！」

のしかかる圧力に体勢を崩しながら、攻撃の動作の後で硬直してい
るドスゲネポスに向かって右から左へと大剣を薙ぎ払う。

無理に放った攻撃故たいした力は籠っていなかったが、タイミング
良く繰り出された一撃は見事にその脇腹を捉え、鱗ごと皮膚を切り
裂き肉を断つ。

ようやく入った一撃に悲痛な叫びをあげ、ドスゲネポスはぐらりと
その身を揺らす。

「もう一丁、喰らいやがれっ！」

ざん、と砂を強く踏み締め、振り切った大剣を肩に背負うようにし
て持ち上げ、全身を使ってたたき付ける。

刃は鮮血の華を咲かせながらドスゲネポスの正面、左肩から右腰へ
と抜けた。その衝撃にドスゲネポスの巨体は後方へ大きく吹き飛び、
砂塵を舞い上げながら地を転がる。

「よっしゃあ！ どうだリエス、やったぞ！」

確かな手応えに頬が緩み、今の瞬間を見ていただろうかとリエスへ
と顔を向ける。

だが、丁度その時リエスはランゴスタを粉碎した所であり、こちら
に気を払ってはいなかった。

「え、なに？ 倒したの？ いつの間に？」

きよとんしたりリエスのその反応に、俺はがつくりと肩を落とした。

「いつの間について……ちゃんと見といてくれよ」

「そんなこと言われたって、あたしも別のを相手してるんだからしょうがない……」

と、リエスは急に言葉を切り上げ、

「避けて、アंक！」

「!!」

即座に身構えたが、僅かに遅かった。

大量の血を傷口から吹き出しながら、ドスゲネポスはその強靱な後ろ脚を使って俺に飛び掛かって来た。咄嗟のことによけきれず、胸の中心に全体重をかけた蹴りが勢いよく直撃する。

「か、はっ……!!」

不意を突く強烈な一撃に肺の中の空気が全て吐き出され、そのまま

ごろごろと砂煙を上げながら転がっていく。

(~~~~まず、呼吸がつ！)

今までと違う、苦痛による脂汗が全身から一斉に噴き出す。鎧越しとはいえ胸部に強打を受けたせいで肺が痙攣してまともな呼吸が来ず、ヒューヒューと喉がか細く鳴る。

酸素不足で狭窄した視野の中、その僅かな領域が前脚を振り上げたドスゲネポスの姿で見る間に埋め尽くされていく。

「~~~~つく！」

余力を振り絞って横へ飛びのくが、掠めた爪が兜を弾き飛ばし、こめかみに浅く裂傷を刻む。

そして、砂の上を転がりながら何とか距離をとろうと膝をついたところで、更に体に異変が生じる。

「……ぐ、かつ」

酸欠でくらくらする頭がやけに重い。瞼すら思うように動かすことが出来ず、意思に反してぴくぴくと小刻みに震える。

(やばっ　これって、麻痺毒　)

まさか、掠っただけでこれだけの効果があるとは。ついには首までがくりと下がり、そのまま砂上に俯せに倒れ込んだ。

(やばっ、声が出ない　首も動かねえ！？)

毒はまだ体にまでは回っていないだろうが、酸欠に弱った体は鉛の

芯でも通したかのように重く鈍って動かない。

甲高い咆哮が再度上がり、そしてどすどすと荒々しく砂を蹴る足音が近づく。

（うおっ！？　ちよっ、マジかよ！？）

びくともしない自分の体と次第に大きくなる足音に心の中で悲鳴を上げた次の瞬間、

弦の弾かれる音と矢が空気を切り裂く音、次いで頭上でガラスの割れるような音が響いた。

ドスゲネポスが苦鳴の唸りを上げると間を置かずに再び同じ音が連続し、その後でどう、と近くで何かが倒れるような音が聞こえた。

「睡眠ビン、持ってきておいて良かった」

さくさくと砂の上を静かに歩く音が耳に入ってくる。
力を振り絞って体を捻り大の字になる。荒い呼吸のまま空を見上げると、雲一つない青空に輝く太陽がやけに大きく見えた。

「ゲネポスは過酷な環境で生きてる分、ランポスよりタフでしゅと

いの」

足音は頭の横まで来るとぴたりと止み、それから声だけが陽射しと混じって俺へと降り注ぐ。

「とにかく、間違いなく仕留めたという確信が得られるまでは決して気を抜かないこと」

ふと、太陽が何か大きな陰に遮られる。逆光でよく見えないが、どうやらその陰は少しお怒りのご様子らしい。

「些細な気の緩みが死に繋がることだってある、それをしっかり心に刻むこと！」

まるで訓練所に戻って来たみたいだな　そんな事を考えて苦笑しながら、砂混じりの短髪をくしゃりと掻いた。

5 箴言と疑念と

ターゲットを達成したという事で後は村に戻って報酬を受け取るだけなのだが、依然力の入らない体を休めるため、とりあえず俺達は日陰を求めて張り出した岩の下に肩を並べて座っていた。

ポーチから取り出したクーラードリンク 体内から熱を奪い、炎天下での活動をサポートする特殊な飲料である をちびちびと口に含んで喉を潤しながら、ぽつりと口を開く。

「結局、一人じゃ無理だったか……」

あの後で俺は眠りについたドスゲネポスの首を叩き斬り、討伐の証拠にその鋭い牙や鱗の一部を剥ぎ取った。

しかし、あの時にもしリエスの補助がなければ今頃どうなっていたか分からない。

隣で脚を伸ばして座り込んだリエスが仕方ないよ、と慰めの言葉を口にする。

「まだハンター稼業を始めて一年でしょ？ おまけにこんな場所じや腕を磨くような機会もないし、経験さえ積みめばそのうち一人でも倒せるようになるよ」

「経験、か……」

ぼんやりとその言葉を噛み締めていると、リエスは静かに口を開く。

「今もしかして、無理をしてももう少しまともな仕事を選んでお

けば良かった、とか思ってたない？」

「……まあ、その通りだ」

その言葉にリエスは一つ溜め息をつく。

「ねえ、知ってる？ 新しくハンターになった人は、その半分が一年以内にギルドからいなくなるんだよ」

「……………」

いつになく真剣な表情でリエスは語り出す。

「その中にはもちろん未熟さから命を落とした人もいるけど、一番多いのは命のやり取りが怖くなって抜ける人なんだ。

酒の席でのよくある馬鹿話の一つに、

『ハンターの半数以上は金目当ての下衆、残りの大半は戦闘狂の気違いで、残った一握りは他人の世話が大好きな偽善者だ』っていうのがあるの。

まあ的を射てるとは思いつけど、人は目標さえあればいつまでもそれに向かって進めるわけじゃない。大怪我を負えばもう傷付きたくないと思うだろうし、仲間が死ねば次は自分かもしれないと恐怖する」

背負った弓に手を添え、リエスは更に話を続ける。

「こんな命掛けの仕事をしてるとはいえ、誰だって死にたくないし心の底では思ってる。新人たちの多くはそれを自覚せずに無理して身の丈以上の相手と戦って、大きな『失敗』を犯してからようやく

それを知るの。

そこから這い上げられるのはほんとに一部だけ。中にはそんな経験をせずにとんとん拍子で成長していく例外……豪傑や天才なんて呼ばれる人もいるけどね。

だから、無理に早く強くなろうと思うことはないよ。私も出来る限りのサポートはしてあげるし、自分なりの早さで成長していけばそれで十分なの」

それからしばらく沈黙が続いた。

その間、俺の頭の中でリエスの言葉が何度も繰り返される。

自分と同年代の人間の口から出た話にしてはやけに重みのあるその言葉……もしかしたら、それはリエス自身がその身を以って味わった教訓のようなものかもしれない。

だとしたら、リエスもまた何らかの『失敗』を犯し、そしてそこから這い上がって来たのだろうか……？

そう思ったら、自然と質問が口をついて出ていた。

「……リエスは、どうしてハンターになろうと思ったんだ？」

リエスの言うところではハンターは三種類に分けられるとのことであつたが、俺にはリエスがそのうちのどれに当て嵌まるのかはつきりしなかった。

「そうだねー……お金が欲しかった、というわけでもないし、まして戦闘が大好きって訳でもないから、やっぱり人の為？ マイノリティかな、あたし」

冗談めかしながらリエスはそう口にするが、それでは納得が行かない。

「それじゃ、どうしてこんなところにいるんだ？」

「こんなところって何よ。ここには村を作ろうと頑張ってる人が大勢いるし、その手伝いをしようと思って来たんじゃない」

筋の通った理屈のように聞こえなくもないが、それだと僅かに妙な点がある。

「……こんなちゃんけなモンスターしか出ないような地域に、リエスみたいに実力のあるハンターが来るなんておかしいだろ。

一年も近くで戦いを見てれば何となく分かるけど、リエスには少なくともそこそこの飛竜までなら討伐できるくらいの力はあるんじゃないか？」

特に危機にさらされてるわけでもない村で、俺みたいな半人前でも事足りるような仕事に一年も関わってるなんて、異様もいいところだ」

本当に人の為にハンター稼業をしてるというのなら、こんなぬるい場所でいつまでもものうのうとしておらず、もっと凶悪なモンスターの脅威に晒されている場所へと向かうはずである。

俺のその追及に、リエスは黙り込んでしまう。

「リエスみたいな実力者が側にいるのは本当に助かる。だけど、その力をどうしてこんなことの為に使っているのかが分からないんだよ」

「……そうね。確かに傍から見れば不自然なのかも」

リエスは脚を伸ばして座った状態から寝転ぶように肘をついて、頭上に張り出した岩を見上げる。

「……まあ、正直に言うと、ハンターになった理由とこの村に来た理由は全くの別物。どっちも教えることはできないけど、この村にいるのはあたしにとって必要な事なの」

それからまたしばらく二人の間に静寂が走るが、次にそれを破ったのはリエスだった。

「さて！ 休憩も十分取ったし、そろそろ帰る準備でもしよつか！」

ぴょんと勢いよく立ち上がり、服についた砂を払いながらいつもの明るい声で言う。

「そうだな。毒もすっかり抜けたみたいだし、そろそろ」

と、立ち上がろうと体を動かした所で下腹部にむずむずとした感じを覚えた。

「つと、悪い。ちょっと待っててくれ」

「ん？ ああ、おしっこね。アンクったら、がばがば水を飲んでるから尿が近くなるのよ」

「う、うるせえ！ 仕方ないだろ、生理現象なんだから！」

「はいはい。いつてらっしゃーい」

ニヤニヤしながら手を振るリエスを背に、少し離れた岩場の陰へとそそくさと移動する。

まったく、締まらない話だ。

6 予期せぬ遭遇

俺には、緊張感が足りないのかもな。

岩場の陰で用を足しながら、そんなことをぼんやりと思った。

周囲の安全を確認したとはいえ、狩場のど真ん中で尿意を催すとは気の抜けた話だ。

ドスゲネポスとの戦いの際も、ちよつといい一撃が入ったからといって目を離し、あまつさえそこからの反撃を許してしまっている。リエスが傍にいるから、失敗してもフォローしてくれるだろうから、言い訳をするのは簡単だが、そんな甘ったれたことがいつまでも通じるわけもない。

今の俺には命のやりとりをしているというその実感が欠如しているのだろう。

今回の討伐だつて、『大剣の腕馴らし』などという下らないことが第一の目的になってしまっていた。じゃれあいなどではない、命を賭けた戦いの中でそんなことを考えているから……俺はいつまでも『新米^{ルキ}』なんだ。

「強く、なりてえな」

ふと、そんな言葉が口をついて出ていた。自分なりの早さでいい。そう言われはしたものの、俺の中には焦りが生じている。

訓練所の同期のやつらはどうしているのだろうか。血気盛んな連中が多かったから、今頃はより危険な狩場を求めて大陸中を駆け回っているのかもしれない。ひょっとしたら一攫千金を狙って古龍の尻でも追い回しているのかもしれない。

なあ、笑ってくれよ。俺はといえば小さな村で小さな鳥竜相手に殺されかけて、小さな女の尻に敷かれてるんだぜ？

自然と自嘲の笑みが浮かぶ。俺に才能なんてものがあるのか知らないが、少なくとも努力に関しては最低ランクと言って差し支えないだろう。

強くなりたい　なるべく早く。では、どうやって？

解答・「強い敵とたくさん戦う、以上」

そんな短絡思考しかできない己の馬鹿さ加減に呆れるばかりだ。

何かを求めれば、それに見合った代価を払う必要がある。そして俺は今、強さの代価に命を払おうとしている。

そこで時間や苦勞を差し出すことが最も賢く、堅実な方法だと分かっている、手っ取り早い方法で済まそうとしているのだ。

自覚のない新人、か。

腰のベルトを締め直して岩陰から出る。頭頂を焦がす陽光が、今だけは俺の中の愚かな思考を焼き払うかのようで心地良い。

「リエスー！　悪い、待たせたな！」

声を張り上げてここからでは姿の見えないリエスと呼ぶ。いくつかの岩の向こう、先程まで体を休めていた辺りから返事が届

く。

「遅いつ！　こっちはもう準備できて」

しかし、それは最後まで続く事なく、

「キャアアアアアアアアッッッ！！！！」

悲鳴と、岩の碎ける激しい轟音によって遮られた。

「リエスっ！？」

声のした辺りから砂中でタルに目一杯詰め込んだ爆薬を炸裂させたかのような高い砂柱が立ち上り、それなりに距離の離れたこの辺りにまで碎かれた岩の破片がばらばらと降り注ぐ。

「おい、リエス！？　くそっ、何が起きた」

腕をかざして飛来するつぶてから顔を守りながら、砂の柱に目を凝らす。

そこにうつすらと浮かぶシルエットが、時間が経つにつれて少しずつ鮮明になる。

そして現れたのは

「っ、ダイミヨウザザミ！」

その外見は分かりやすく言えばヤドカリに似ているが、サイズは桁違いにも程がある。

一対の盾を思わせる肉厚のハサミはそれだけで人間の体積以上もあり、全長は見上げるほど大きい。

外から覗けるのは顔とハサミ、それと硬い殻に覆われて節くれだった四本の脚だけで、体の半分近く、内蔵などの身体構造上の弱点は背負った一角竜の頭蓋骨に収められている。

その角の根本に、ドスゲネポスの死体が引っ掛かっている。血の臭いに誘われてここまできたのだろうか。

ダイミヨウザザミは動きこそさして機敏ではないが、その巨大なハサミで砂を掘り、地中を潜行することで姿を見せずに移動することができる。

そのため、何の心構えをする暇もなく突如地中から現れたダイミヨウの出会い頭の一撃を受け、呆気なく命を落とすハンターも少ないという。

「リエス！ どこにいるんだ、返事をしろ！」

おさまりつつある砂塵の段幕に向かって声をあげ続けるが、一向に返事が返ってこない。

まさか、と最悪の考えが頭を過ぎったが、それから間もなくダイミヨウの下で尻餅を着いているリエスの姿を確認する。

ダイミヨウは今の所リエスに気付いてはいないようで、近くに転がっているゲネポスの死体を漁っている。だが、一旦気がついてしまえば食事より外敵の排除を優先するであろうことは明らかである。

「リエス、一先ずここから離れよう！ 逃げるにしても倒すにしても、取りあえず態勢を整え」

と、そこで異変に気付いた。

リエスが動かない。

意識はちゃんとあるのだろうか、ダイミヨウを見上げたまま茫然と座り込んでいる。

「リ、リエス……？」

距離があるためここから表情を伺うことは出来ないが、何か普通で

はない空気を纏っている。

と、ダイミヨウが振り返り、リエスの姿を視認した。

ギシイイイイイツツツ!!

見慣れぬ珍客との遭遇に、ダイミヨウはそのハサミを振り上げて掠れるような音色の咆哮を上げる。

それを目前で受けたリエスは、びくりと身を震わせ……ここまで微かに聞こえる程度の音量で

「ひッ」

恐怖に満ちた、か細い悲鳴を上げた。

「リエス!？」

今まで、例え戦いの中であっても陽気な振る舞いを見せていたりエスが、まるで小さな少女に戻ったかのように縮こまって震えている。突然のダイミヨウザザミの出現よりも、その姿の方が俺にははるかに衝撃的だった。

ダイミヨウは振り上げたハサミをそのままに、カサカサと砂の上を移動する。

「あ、あ……」

詰められていくリエスとダイミヨウとの間の僅かな距離。リエスは
一歩も動かずに、ただそれを見つめているばかり。

「なにやってんだ！ 早く立て！」

俺はとつくにリエスのもとへと駆け出していたが、それでもダイミ
ヨウがその攻撃射程内にリエスを捉える方が早い。振り上げられた
腕が一際しなり、そして

「リエスーーーーー！！」

巨大なハサミに薙ぎ払われたリエスの体が、悲鳴一つ上げずに大き
く吹き飛んだ。

7 窮地と機転

リエスの体は二度、三度と地面の上を跳ねた後、砂を巻き上げながら転がっていく。

幸か不幸か、弾き飛ばされたのは砂の上だったのでそれ以上のダメージの心配はない。もし逆のハサミで殴られていたら、岩壁に全身を打ち付けて深刻な怪我を負っていただろう。

だが、そんなことはどうでもいい。

「てめえええッッ！！」

ハサミを振り切った姿勢で硬直するダイミヨウに向かって駆ける。そのまま立ち止まる事なく、勢いを付けてだんっ！と高く跳躍し、背中の大剣の柄を掴んだ。

「うらああッ！」

空中で大剣を引き抜き、着地と共に全体重を乗せた渾身の一撃を放つ。

ギャリイッ！と耳障りな擦過音を上げ、刃は振り切ったのとは逆のハサミに命中、その硬い外殻にヒビを入れその下の肉にまで食い込んだ。

だが、

「ッ　浅いだとっ！？」

確かにダメージを与えはしたが、大剣の刃はハサミにその刀身の半ばを埋め込んだ辺りで止まり、両断には至らなかった。技術はともかく力に関しては自信があつたのだが、その力任せの一撃すらこの巨蟹には不十分であつた。

驚愕している暇もなく、ダイミヨウは反対のハサミを俺の左半身に向かつて薙ぎ払う。

「う、おっ！」

慌てて右へと飛びのき、すんでの所で回避する。ずるりと大剣が引き抜かれたハサミから青い血液が噴水のように飛び散った。

（くそっ……どうする！？）

手元の大剣を見れば、たったの一撃で既に刃毀れが生じている。悔しいが、今の武器にこいつの硬殻を叩き割るほどの威力はないようだ。

おまけに、ダイミヨウの背後　砂の上に伏したまま動かないリエスの姿を見るに、それよりランクが数段低い俺の装備では精々二発も喰らえば防具としての機能を失ってしまうだろう。

まともにぶつかれば圧倒的に不利なのは俺の方、となれば残る手段は逃走であるが、しかしそれではリエスを見捨てることになる。ならばなんとか隙を作って

と、頭の中で戦術を練っている間にダイミヨウは再びそのハサミを振り上げ、多数の節足をカサカサと動かして無造作に間を詰めてくる。

「くそっ」

十秒でいい、何とかして隙を作れば……！
舌打ち一つ、ダイミヨウに向かって大剣を構える。すると、ふと視
界の端に何かを捉えた。

半ば砂に埋もれた、ハンター用のポーチ。リエスが攻撃を喰らった
際に落したのだらう。

「……………！」

それを見て一つの案が閃いた。この場で打ち倒すことは厳しいが、
逃げる時間を稼ぐだけならなんとかなるかもしれない。

チャンスは一度、しかしそう無理のある作戦ではない。覚悟を決め
て歯を食いしほる。

もはや目前に迫ったザザミを見据え、回避のタイミングを計る。

モンスターの攻撃には牽制も様子見もない。ただ持てる力を振り絞
った一撃を放つだけであり、それ故に動作後の隙は大きいし注意深
く見ていれば回避することもそう難しくはない。

そして、繰り出されたのは左　先程俺が刃を立てたハサミでの殴
り付けるような一撃。

それに合わせて大剣を寝かせた上で腰を落とし、大剣を体の側面全
体で下から支えるような体勢を取る。正面から受け止めずにその力
を流す構えだ。

そして、超重量の一撃が傾いだ鉄板の上に掠るように激突した。

「があ　つく！」

がくりと折れた膝を気合いで支え、逆にハサミを上へと押し返す。

結果、繰り出されたハサミは僅かにその力のベクトルを変えられて大剣の上を滑るように通り過ぎていく。ダイミヨウは全力の空振りにバランスを失い、しばらく動けなくなる。

その隙に俺は砂に埋まったポーチに向かって走り、それを素早く拾い上げた。

中身を確認すると、予想と期待の通りのものが中にぎっしりと詰まっていた。

「……よし！」

ここからは精確な動作が必要となる。その邪魔になる大剣を背中への留め具に固定し、ポーチと拾った大きめの岩をそれぞれ手に持ってダイミヨウと向かい合う。

二度も攻撃を避けられたことに業を煮やしたか、ダイミヨウは再度咆哮を上げた後に一直線に向かってくる。

集中　右か左か、とにかく次の一撃をかわしさえすればなんとかなる。頬に汗が伝うのを感じながら、僅かな予兆も逃すまいと目を凝らし、腰を落とす。

そして三度目の対峙、繰り出されたのは

両方。

「うおおおおっツツッ!!」

それに対して俺が選択した回避方法は、後ろに下がるでも左右に避けるでもなく、前に飛び込むこと。
頭上から聞こえる空気を裂く鈍い音にくじけそんな勇気を奮い立たせ、更に地面を蹴る。

結果、ハサミは後頭部を掠めるようなぎりぎりの距離を通過し、地面を叩いて盛大に砂を巻き上げた。

「これでもっ……」

左手に持ったポーチを目の前の巨大な頭部の下方、絶えず細かくうごめいている口へと突っ込む。

「食らってろ!!」

更に右手で握り締めた岩を叩き込むと、ぱりん、と何かの割れるような音が響いた。

すかさず横に跳び退って距離を取り、様子を観察する。

最初のうちはなんの変化もなかったが、こちらへと振り向いてそのハサミをそれしか知らないかのように再度振り上げ、一步を踏み出

さんとした時に効果が出始めた。

振り上げられたハサミは小刻みに痙攣し、踏み出した足も次に続く事なくがくがくと震えるばかり。

ダイミヨウはそれからようやく口中の異物を吐き出すが、既に薬は完璧に効果を表している。

吐き出されたポーチと岩は、紫・黄・青の毒々しい色に染まっていた。

「毒に麻痺薬に睡眠薬……お気に召したか、ヤドカリもどき」

そしてダイミヨウザザミはついにその体を支え切れなくなり、重い音を立てて崩れ落ちた。

8 噴出する感情

額に乗せた濡れ布巾を替えること三度。それだけの時間の後にようやくリエスはその目を開いた。

リエスはそのままぼんやりとした表情で、横になったまま首を動かさずにゆっくりと周囲を見回す。

その視線が枕元に座る俺の顔で止まり、しばらく無言で見つめ合った後にふと顔を逸らした。

「……………具合はどうだ？」

それをきっかけに、できるだけ静かな声で話し掛ける。

「……………頭がくらくらする。視界もぐにやぐにやだし、耳鳴りも少し」

「……………脳震盪だな。もう少し寝てろ」

か細い声で伝えられたのは、これまた珍しく弱音である。

普段なら無理にでも強がってみせるだろうに、今は本当に弱々しく見える。

「あれから、どうなったの？」

「……倒し切れはしなかったけど、なんとか撃退した」

元は傷口から体内への混入を目的に調合された薬物である。大量とはいえ経口による摂取では十分に効果を発揮しなかったようで、不利を悟ったダイミヨウザミはあの後二本のハサミを器用に使って砂に潜り、どこかへと逃げてしまった。

あわよくばとどめを刺そうとも思っていたので少し拍子抜けした所もあったが、まずはリエスの介抱が先だと考え直し、気絶したリエスを肩に担いでキャンプまで戻って来たのである。

リエスは表情の欠落した顔でそっか、と小さく呟くと、

「ごめん、迷惑かけたね……」

と、謝罪の言葉を口にした。

ここで『気にするな』などと言えたら話は短くて済むが、とてもじゃないがそんな言葉でお茶を濁す事の出来る心境では無い。

あんな姿を見せられて動揺せずにいられるほど、俺のリエスに対する信頼は浅くないのだから。

「なあ、一体どうしたっていうんだ」

こちらに視線を向けようとせずに、ただ汚れの染み付いたテントの天井部分を見つめているリエスに問い掛ける。

「あの時のお前、明らかに変だったぞ。急に出てきたダイミヨウにびつくりしたって雰囲気じゃなかったし、何をそんなに……怯えてたんだ？」

リエスは眉一つ動かさず、沈黙を保っている。
話す気が無いのか　それでも俺は言葉を続ける。

「さっき、お前自身が言ってたよな。誰だって死にたくないと思ってるって。それは俺にも分かるけど、でも　」

そう言った所で急に、

「俺にも、分かる？」

「……リエス？」

リエスがその唇を動かし、

「あなたに、何が分かるの？」

落ち着いた、だがどこか背筋の凍るような声で、

「まだハンターになって一年程度の、たいした苦勞も味わわず、本気で死を身近に感じたこともなく、絶対の理由があるでもなく、なんとはなしにハンターという仕事を選んだようなあなたに」

「いったい、何が分かるっていの!？」

俺のことを突き放し、敵意を剥き出しにした。

「どんなに止血しても止まらずに、傷口から次々と流れ出ていく血を見たことはある!？ 火竜の炎に包まれて、手搔き苦しみながら死んでいく人間の臭いを嗅いだことは!？」

あたしの言うことなんて本当は何一つ分かってないくせに、口先だけで『分かる』だなんて言うな!!!」

一切の表情が抜け落ちたかのような顔が今は怒りと敵意に満ち、もし視線に力があるならば飛龍ですら墜としかねないほどの危険な輝きを放つ瞳が俺を射抜いている。

原因は俺の言葉であるのは明らかだが、一体リエスのどの部分にある激情の引き金を引いたのか分からなかった。

だから。

「分かんねえよ」

建前なんか棄てて、本音を正直に口にしよう。

「だったら、知ったような口を」

「分かんねえよ！！ お前の事なんか、俺に分かる訳ねえだろうが！」

急に吐き出された怒声に、リエスはびくりとその体を震わせる。

「何なんだよお前は！ 目茶苦茶強いくせにこんなちんけな場所に来やがって、そのくせあんなヤドカリ風情に腰を抜かしやがる！ ハンターになった理由は話さねえ、今の目的も分からねえ、これからの目標も示さねえ、ない・ない・ないの三拍子じゃねえか！ そんなんで一体、お前の何が分かるってんだ！

俺が知ってるのは同じ年であることと、いつものお前はどんな時も陽気な笑顔を浮かべていて、そんなへたれたセリフなんか決して吐かないって事ぐらいだ！」

言っている間に更に勢い付いて、胸の内に溜まったものをぶちまける。

「お前の過去には興味があるさ。それでも、何か言いづらい事でもあるんじゃないかと思って深くは聞かなかった。

だがな、今に至るまで追及されないのいいことに黙っておきながら、こんなことになった途端『知らないくせに』は無いだろぅが！ 一人じゃ乗り越えられないような辛い事があつたなら人に話せばいいじゃねえか！ 近くに俺がいるじゃねえか！ それとも、俺なんかには話したくないってのか！？ 俺にはその程度の価値も無い

のか!？」

リエスは唇を噛んで僅かに俯き、薄汚れたシーツを強く握り締めている。

最後に荒くなつた息を一度調え、落ち着いて語りかける。

「お前はどう思っているか知らないが……リエス、俺はお前の事を大事な仲間だと思ってるし、尊敬もしてる。初めて外で会つたハンターだからとかそういうのを抜きにしてもな。

そんなお前が俺の知らない所で苦しんでるなんて、とてもじゃないが放っておける問題じゃ『なかった』んだよ」

そう言つて、リエスをその場に残してテントを出た。

(……………あーあ)

岩に腰掛けて空を見上げていると、じわじわと後悔の念が湧き上がってきた。

おそらく、これでリエスとの関係も終わりだろう。そう思うと胸にぽっかりと穴が開いたような感覚に捕われた。

まあ、仕方ない、か。

実は、リエスに言ったことは俺自身にもしっかり当て嵌まる。

何故ハンターとなり、何の為に命を張り、何を目指して強さを求めるのか……。

その質問をすれば当然自分にも返されるだろうから、俺より余程複雑な理由があるであろうリエスには聞けるはずもない。

要するに、お互い秘密にしていることが多すぎたのだ。

……なんて、まるで恋の終わりみたいな表現で締めかと思ったら、どうもこのドタバタはもうちょっとだけ続くらしい。

「…………あたしも、甘えてたのかな」

背後から声が聞こえる。

「こんな内緒だらけの関係もそれなりに心地良かったんだけど、もうそろそろ終わらせないとね」

一つの岩に、背中合わせに座りながら。

「……むかしむかし、あるところに一人の女の子がいました」

一歩踏み出したのは、どちらが先か。

それは、近づく為の一歩か、別れの為の一歩か……それはまだ、分からない。

9 朱斑の舞姫【上】（前書き）

突然ですが、警告カテゴリを設定しました。

この部分は初稿に比べればかなり抑えたのですが、流血表現の苦手な人は少し嫌悪感を覚えるかも知れません。

残酷度を数値化すればこれで30といったところでしょうか。せっかくなのでいずれは100に達する文を書きたいものです。

では、本編をどうぞ。

9 朱斑の舞姫【上】

~~~~~

むかしむかし、あるところに一人の女の子がいました。

両親から受け継いだ碧玉石のような深い青色の髪をいつも誇らしげに、見せ付けるかのように長く伸ばしていました。

女の子には二人の兄がいましたが、気の強い彼女はいつも二人と喧嘩ばかり。

『“おとこのこはおんなのこよりぜったいにつよい”なんておかしい』、女の子はそう考えていました。

そんな思いを胸に抱きながら成長した女の子は、自分なりの方法でそれを証明するために、まだ背も伸び切らない年齢でありながらハンターの世界に足を踏み入れました。

最初は子供のお遊びと周りも笑っていましたが、少女は初めての仕事でいきなりドスファンゴを倒してみせて皆を黙らせました。

その後もイヤンクック、ゲリヨス、ドドブランゴなどの難敵を次々と打ち倒していき、一年も経つ頃には一人でリオレウスすら討伐できるほどの腕前を身につけていました。

そしてある日、少女が狩猟から帰ってくると街は騒然としていました。

なんでも、街の近くで見たことも無い古龍が観測されたとの情報が入ったのだそうです。

少女はそれを聞いて、恐がるどころか逆にとても喜びました。

『これは、あたしの考えを証明する絶好のチャンスだ！』

周りの反対する声を押し切って、彼女は一人でその古龍を退治しにきました。

狩場に近づくと天候は不自然に大きく崩れ、激しい嵐となりました。その場所は一年を通して穏やかな気候であることで知られているのにです。

他の竜にはない、永い年月を生きた古龍にのみ備わる特殊な能力がそれを引き起こしたようです。

そして、一際風雨が強まったかと思うと、雷鳴を反射して金属質の輝きを放つ一頭の白龍が空から舞い降りてきました。

『お前を倒して、あたしが正しいことを証明してやる！』

少女は古龍を目の前にしても一向に臆する事なく、堂々と両手に持った二つの剣を構えました。

戦いは激しく、長い時間続きました。

体格には倍以上の差がある両者ですが、優勢なのはむしろ小さな少女のほうでした。

このままなら撃退といわず討伐だって不可能じゃない、そんな考えが少女の中に浮かびます。

そしてとうとう、龍の吐き出す稲妻と風の弾丸をくぐり抜けた少女の渾身の一撃が鎧のような鱗を突き破り、龍は喉元から鮮血を噴き出して大きく体勢を崩しました。

倒した。勝った。観客がいれば百人中百人がそう思ったでしょう。少女もその確かな手応えに、僅かに気を緩めました。

次の瞬間、少女の小さな体は高く高く宙を飛んでいました。

龍はまだ余力を残していたのです。固い地面の上をゴム鞠のよう



に何度も弾んだ少女は、真つ赤な血を滝のように吐き出しながらも、震える足で必死に立ち上がろうとしました。

しかし、それはありませんでした。

龍の追撃、雷を纏った猛烈な勢いの突進が直撃し、少女の体はまとも大きく弾き飛ばされます。

更に運の悪いことに、少女の飛ばされた先は高い崖となっており、背に翼を持たない少女はなす術もなくその下へと転がり落ちていきます。

崖の下で、少女は苦しんでいました。落下中に岩とぶつかって全身にいくつもの傷ができ、また体の所々からは赤い筋が絡まった白い何かが覗いています。

特に酷いのは、龍の体を覆う硬い皮膚との激突により、腹部にぱっくりと開いた一文字の深い傷。そこから流れ出す大量の血が水溜まりを赤く塗り潰していきます。

あまりの激痛に失神することも出来ず、かといって逃げ出そうにも両足が変な方向に曲がってしまっています。もはやどうすることもできません。

このまま龍に食べられて、死んでしまうのだろうか　彼女はそう思いましたが、いつまで経っても龍は現れません。

それどころか、あれほど激しかった嵐がみるみる収まって、あっという間に雲一つ無い青空が広がりました。

古龍は傷の快復を第一に考え、戦いの決着は後回しにして逃げ出

したのでした。

太陽の下、一人傷だらけで残された少女。

『ここまで追い詰めておきながら逃げられた』という悔恨。

『あえてとどめを刺さずに見逃された』という憤慨。

『男たちが怖じ気づいていた古龍の撃退に成功した』という充足。

彼女が感じ、考えていたのはそのどれでもない、ただ一つの単純なことでした。

『しにたくない』

彼女は泣いていました。

子供のように、血の混じった鼻水を垂らしながら泣いていました。

## 10 朱斑の舞姫【下】

燦々と輝く太陽の下、静寂に包まれた世界の中。薄れゆく意識に、今までに見てきた他のハンターたちの死に際の姿が去来します。

イヤンクツクの火球を受けて燃え上がる少年。

ガノトトスの吐く高圧の水流に鎧ごと骨と内蔵を碎かれ、一度血の塊を吐いた後ぴくりとも動かなくなつたガンナーの女性。

リオレイアの太い足に頭を踏み潰され、断末魔を上げる間もなくその生を終えた肌黒の男性。

今まで記憶の片隅に“運の無い奴ら”という題で纏められていたそれらが丁寧のひとつひとつ分別され、何か特別な意味を持たされたような気がしました。

痛い。

苦しい。

怖い。

誰か、助けて……

頭の中のイメージと今の自分の姿が次第に重なっていきます。彼女はこれから確実に訪れるであろう死を自覚し、また恐怖を一層膨らませました。

しかし、彼女のハンターとして鍛え上げられた体も致死量に近い出血には耐えられず、ついに彼女はその意識を失い

気が付けば、街の診療所のベッドの上でした。

彼女は死語の世界にしては随分と見慣れた風景だな、などと初めは混乱していましたが、目を覚ました事を知り急いで駆け付けた医者から説明を受けて状況を把握しました。

何でも、一人で行ってしまった彼女の事が気掛かりで、こっそりと後をついてきたハンターがいたそうです。

彼は丁度現場に着いた時に彼女が崖下に落とされる場面を目撃し、それから慌てて落下地点へと向かって死にかけていた彼女を見つけました。

見たところ助かるかどうかは微妙でしたが、彼はその場で出来る限りの手当てを施すと、急いで街へと搬送したんだそう。

そしてそれから10日経った今日、ようやく目を覚ましたということです。

それからしばらく、彼女は慌ただしい日々を送りました。  
なにせ命に関わるような大怪我の後です。医者の判断で面会の大

半は断られたのですが、それでも多くの人々が彼女の元へと訪れました。

街を救った英雄として感謝の意を告げる街長、大手柄を上げたことに称賛を贈るハンター仲間、新種の古龍について詳しく話を聞き出そうとする竜人族の学者。

様々な人が訪れては、彼女とそのような話をしていきました。

怪我人なんだから少しは静かに休ませてくれ、なんて彼女は愚痴を言っていました。内心とても喜んでいました。

女は男に劣る存在では無い。それを今まさに証明したからです。

怪我が治ってすぐ、彼女は仕事を受注してハンターとしての活動を再開しました。

とはいえ、長いこと病室のベッドの上で寝たきりの生活を続けていた訳ですから、いきなり飛竜の討伐というわけにもいきません。内容は手軽な素材の収集でした。

彼女が違和感に気付いたのは狩場に着いてから。

木漏れ日に包まれた森の中。ざわざわと周囲を包み込む虫や鳥の気配、遠くから響くモンスターの遠吠え、草を掻き分けて進む際に立ち上がるむとした青臭い匂い。とうに馴れたはずのそれらがやけに敏感に感じられます。

久しぶりだから緊張してるのかな。その時はその程度にしか考えていませんでした。

地図も見ずにてきばきと森の中を移動し、一通りの素材を集め終

えた頃。側の茂みががさりと音を立てました。

現れたのはランポスが一匹。普段群を成すランポスの生態からすると珍しいことです。

まあ、雑魚が群れていようとなかろうとなんら違いは無い。そう思つて双剣を引き抜き、一步を踏み出す……

と、そこで急にランポスが咆哮を上げました。

戦闘を前に興奮して声を上げるのは別段珍しい事ではありません。人も動物も関係なく、誰もがする行為です。

しかし彼女は、何者かに足首を掴まれたかのように急に動けなくなつてしまいました。

口元から覗く牙、手足の先から伸びた鋭い爪、厳しい生存競争によつて鍛え上げられたしなやかな筋肉。

彼女が今まで何とも思つていなかったそれらが、異様なまでの迫力を持つて彼女に迫ります。

同時に、その手に握られた一对の剣　今まで無数の困難を切り開いてきたその刃が、まるで枯れ枝のように軽く頼りないもののよう

うに感じられました。

ランポスは体をぐつとたわませ、その太い後ろ脚で地面を蹴り大きく飛び掛かります。

彼女にとってはもはや見ずとも避けられるようなお決まりのパターン攻撃　ですが、彼女の体はまるで石になったかのように動かず、まともに受けてしまいました。

陸の女王と呼ばれる竜の亜種から取れる桜色の鱗で作られた頑丈

な鎧には傷一つ付きませんでした。その衝撃に彼女は尻餅を付きました。

そして座り込んだ彼女が呆然と顔をあげると、そこにあるのは牙を剥くランポスの姿

彼女は悲鳴を上げて逃げ出しました。

モンスターを前にしたとき、あの時の死のイメージが強烈に思い出されたのです。

足がすくみ、頭の中が一瞬にして真っ白になるほどに強く沸き上がった感情は、ハンターとしては致命的な　モンスターへの恐怖それが彼女の心には、深く深く刻まれていました。

どんなに巨大な飛竜でも軽く蹴散らせる程の力を持っていた彼女は、一頭のランポスすら相手に出来なくなってしまうていたのです。

街に戻り集めた素材を渡すと、彼女はその日の内に荷物を纏めて街を去りました。

今の自分を見られたくない、そう思った彼女はハンターとしての自分を知る人がいない場所で静かに暮らしていこうと考えました。



……そうして街を去り、新しい村で生活を始めて丁度季節が一つ過ぎた頃、一人の若いハンターが村にやってきました。

修業中だと言う彼は、各地を転々としながらモンスターを狩っているのだそうです。とはいえこの辺りにはモンスターなどほとんどいないので、近く行われる村の祭りを目的に息抜きにでも来たのでしょう。

ある日、彼女が友人に誘われて酒場に行くと、そこには何人かの村人に囲まれて話をせがまれている彼の姿がありました。小さな農村には娯楽が少ないので、彼のような旅人の語る話は貴重な刺激となるのでしよう。

そこから少し離れたテーブルに付いた彼女も、気付けば友人に手を引かれてその輪の中に入っていました。

最初は別段話すことも無いと渋っていた彼も酒が入るにつれて次第に饒舌になり、最後には自ら自慢げに話し出すようになりました。

イャンクックとの戦いや災いを運ぶ黒い龍の伝説、巨大すぎるハンマーを作った膝上の川で溺れ死にかけた馬鹿なハンターの話など、彼女には聞き覚えのあるものばかりで大して面白くはなかったのですが、彼の話は突然別方向に飛びました。

そういえば、俺は少し前まで“……………”って街にいたんだけど、そこで変な事件があったんだよ。

彼が口にしたその街は、彼女がハンターとして一年を過ごした街でした。彼女は突然出て来たその名前に驚き、また自分がいなかった後で一体何が起きたのかが気になりました。

彼の話は、街を襲った古龍についてのものでした。

一度は一人の勇敢なハンターが撃退に成功して事無きを得たのですが、そのしばらく後に再び姿を現したのだそう。

街のハンターが総出でその撃退に乗り出したにも関わらず、古龍はそれらには一切関心を向けずしばらく空を飛び回った後、ひとりでに去っていったのだそうです。

それから更に数日後。姿を眩ませていた古龍が、突然街の中心に現れました。

古龍はハンターズギルドを襲撃し、寮として使われていた建物の一部を破壊しました。その頃には古龍の出現に気付いたハンターたちが武器を持って集まっていたのですが、古龍はそれを一瞥すると興味を無くしたかのように宙へ舞い上がり、夜の空へと消えていったのだということです。

まるで何かの冗談のような話だが実際に起きた事件であり、目的の分からない古龍の行動にギルドも混乱している、とも彼は言いました。

。

ですがその話を耳にした瞬間、彼女は気付きました。

あの龍は、あたしを探しているんだ　　、と。

それから毎晩、彼女は悪夢にうなされるようになりました。  
夢の内容はどれも同じで、突如現れた一頭の龍に殺されるという  
もの。

爪に引き裂かれたり、牙に貫かれたり、吐き出される風雷に吹き  
飛ばされたりといくつか種類はありましたが、どれも最期には苦し  
みの中で死んでいきました。

明らかな致命傷を与えた後、龍は緩やかに死に向かう彼女の姿を  
ただじっと見つめ、何か落胆したような瞳をして去っていくのです。

夢の中でもたらされる死の恐怖から彼女は眠れなくなり、積み重  
なる心労に髪は色を失いました。

『あたしは、どうすればいい』

苦しんで苦しんで、そればかりを口にしていました。

明日にでもあの時の龍が現れて殺しに来るかもしれない。他のハ  
ンターとは戦う気が見られないので、誰かが討伐してくれるという  
可能性も無い。寿命だって古龍と人では桁が一つ違う。

ならば、ただ殺される日をこつして待ち続けるしか無いのか

最後の最後、ぎりぎりの瀬戸際で彼女は思いました。

『 そんなこと、我慢できるか！ 』

震える足で彼女は立ち上がりました。

あの古龍と再び戦い、そして今度は完全に決着をつけるために。

復帰に際し、彼女が選んだのはランスでした。その長いリーチと、槍と同時に扱うドアを引つpegしてそのまま持ち手を付けたかのような分厚く巨大な盾は、彼女に僅かながら安心感を与えてくれまし

た。以前と違う、紅色のクックの鎧は初心に戻ったの新たな出発を意識してのもの。まずはランポスから始め、少しずつ克服していかなくてはなりません。

半年かけて体と技を鍛え直した後、彼女は近くの街のギルドへと出向いて一つの仕事を受けた。

その内容は、創設される村の周囲の警備とモンスターの退治でした。

~~~~~

10 朱斑の舞姫【下】（後書き）

美しい宝刀があった

豪奢な柄拵えに内から輝きを放つような強い青みがかかった銀の刀身

見目に良いだけではなく、刃に乗った小さな花弁が自らの重みで裂けるほどの鋭さを兼ね備えた、真の名刀であった

それには鞘が無いという欠陥があったのだが、その暴力的なまでの魅力の虜となった職人達は次々とそれに見合うだけの鞘を拵えた

宝刀は絢爛豪華な無数の鞘にその身を包んだ

しかしある日、戦いの中で宝刀は半ばから折れてしまった

幸か不幸か鞘だけは無数にあったので、その中に折れた宝刀を入れておけばそのことがばれることはなかった

その代わりに、新たな鞘が作られることもまたなくなつた

こうして、そこには沢山の華美な鞘と刃を失つた宝刀だけが残されたのであつた

11 力の在り処、その向かう先

「……まあ、こんなところだね。」

今までその片鱗すら窺い知ることの出来なかったリエスの過去と内面。それは、俺が思っていた以上に苛酷なものだった。

「アंकは緊張して気付いて無かったみたいだったけど、さ。二人で初めてドスランポスと戦ったとき、あたしの足……震えてたんだよ。」

ランポスやファンゴくらいだったらなんとかまともに戦えるようにはなったんだけど、大型のモンスターになつてくるとまだ怖さが残るんだよね」

「……そうか」

それなのに、突然その数倍は巨大なダイミヨウザザミが目の前に現れたものだから、恐怖のメーターが一気に振り切れてしまったのだろう。

背後から一つ、小さな溜め息が零れる。

「あたしも強さが欲しい。2年前 いや、それを上回る力が……だけど、心に根を張ったこの感情がどうしてもその邪魔をするんだ。」

あれから身長も伸びたし、重い槍を振り回して腕力もついた。それでも、あの頃の闘争心はどうしても取り戻せない」

戦いの場に於いて最も重用なのは技術や体格の優劣ではなく、心

の持ち様である。東方の格言にある『心技体』とは、確かそれを表したものだっただ。

普段は無双の豪傑でも、少しのアクシデントで心を揺らすようでは本当の強者とは言えない。どんな状況下でも余すところなく力を発揮できることが重要なのである。

……まあ、そんなのは理想論であり、複雑な感情を持つ人間である以上は実現不可能な話なのだが。

「……これで、あたしの話は終わり。あたしはあの時の古龍を倒すため　あたしの生を取り戻すためにハンターとして戦っているの。間に合うかは分からないし、ひょっとしたら二度と会うことも無いのかもしれない。それでも、あたしは戦い続けなくちゃならない。あの夢に負けないように、立ち向かわなくちゃならないの……」

それでリエスの話は終わりを迎えた。と、なれば。

「……順当に言えば次は俺が話す番なんだろうが、……悪い、リエス。後にしてもらってもいいか？」

「……話したくないの？」

穏やかな、しかし僅かに悲しみを孕んだ声が返ってくる。やべ、言い方間違えた。

「あ、いや、そうじゃなくてだな。別に渋ってるわけじゃなくて、もう結構時間が経ってるのにこれ以上話しているとチャンス逃しち

まっからさ。戻ったら必ず話すから、ちょっと行ってきたもいいか？」

「行ってくる、って……どこに？」

不意に立ち上がった俺に振り向き、怪訝な顔でリエスが尋ねる。

「いやま、そりゃ当然……」

「ヤドカリ退治」

「なに言ってるの!？」

そんな事を言い出すとは毛ほども思っていなかったようで、目を見開いてリエスは大声を上げる。

うーむ、俺としては当然の帰結なんだがなあ。

「あいつは毒の影響で弱ってるだろうし、行き先だって地図を見れば大体想像は付くからうまくやれば不意も突ける。まともにぶつかったら確かに不利なのは俺だけでも、今に限って言えば俺にも勝ち目はある……というか、多分勝ち目があるのなんか今ぐらいじゃないか？」

大剣は研ぎ直したし、念のために余分に持ってきた治療薬も大半が手付かずのまま残っている。リエスの分は薬液に塗れてアレになっってしまったが。不燃ゴミというか。

「第一、依頼の中にあれの討伐は含まれてないでしょ！ そんなことしてより、村に戻ってギルドに報告した方が……」

「この砂漠は比較的安全だと思われてるから、ここを通る人達はたいた準備をしないはずだろ。」

そこにダイミヨウザミなんてもんが出て来たらとてもじゃないけど太刀打ち出来ない。かといって今から村に戻ってギルドに報告して、ギルドがその事実を確認してから付近の集落に情報を流す、なんてやってたら時間がかかりすぎる。

それに、この砂漠を通る人はおそらく俺達の村を目指してる人が大半だろうから、後々の事を考えれば少しでも早く狩っておかないと」

傍に伏せておいた兜を被り直し、瓶の底に僅かに残ったクーラードリンクを逆さにして飲み干す。喉元を過ぎる液体の凍るような冷たさに、思考がきりっと引き締まる。

「リエスはここで休んでくれ。まだ完調じゃないだろうし、起きてると辛いだろ？」

振り返らずに、頭の横で手を振りながら歩き出す。しかし、僅かに歩いた所で

「……なんでそんなことするの？」

俺の背中に、ぼそぼそと話すリエスの声が掛けられた。

「アंकの腕じゃ、弱つてるとはいってもダイミヨウの相手をするのはまだ早いよ。正規の仕事じゃないから報酬が出るわけでもないし、それに人通りが多いわけでもないから数日のうちに通行人がいるかも、おまけにそれが襲われるかも分からないじゃない。

ここで引いたってリスクがそんなに大きくなるわけでも無いのに、どうして無理をしてまで戦おうとするの……？」

言外にリエスの意志が所々感じられる。

この場でダイミヨウを退治することに何の意味も見出せないのだから、俺の行為が単なる死にたがりの暴走にしか感じられない。

……まあ、そうだろうな。

「確かに、数日の間にここを通る人がダイミヨウに襲われて命を落とす、なんてのはほとんど無視できる程度の確率かもな。

だけど、それは『0じゃない』だろ？」

確かにちつぽけな理由だけど、それでも

「だったら、十分にやる価値はある。倒すことで可能性が0になるのなら、俺はそれを根拠に命を張れる。

なんせ俺は、『残った一握りの偽善者』だからな」

俺には、戦う力がある。

なら、それを使わないでどうするんだ。

背負った大剣の重みを感じながら、俺は再び砂岩の世界へと踏み出した。

走り去っていく背中を、あたしはただ見送るしかなかった。

アंकは戦おうとしている。

今の自分では厳しい戦いになるだろうということを知りながら、それでもいるかも分からない見ず知らずの他人の為に命を張って。

「……………それであたしは、何をしてるんだ？」

意識を失う寸前の風景、目の前に迫ったダイミョウの姿を思い出すと、今でも体が震えてくる。

だが、それでも。あんな狩りのいろはも知らないような新米に休んでいろなんて言われて

「大人しく震えていられるほど、あたしは可愛い性格をしてないんだよ、アंक　！」

震える手を伸ばし、弓を手取る。

その体とは裏腹に、瞳には強い闘志が宿り始めていた。

12 鋼爪か堅鉄か

砂を高く蹴り上げて砂漠の中を進みながら、片手に握りしめた地図に目を落とす。

ただ闇雲に砂漠を走り回っているわけでは無く、テントを離れてからずつとある一カ所を目指して駆け続けた。

十中八九、ダイミヨウはそこにいるはずだ。

確信はある。もしこの地図に載っていない別のものがあれば話は変わってくるが、そうでなければまず外れることは無いだろう。

駆け出してから数分。果たして、俺はダイミヨウの姿を捉えていた。

場所はこの砂漠唯一のオアシス。ダイミヨウはこちらに背を向けた状態で口を濯いでいる。

左のハサミに走った大きな亀裂があ那时的の個体であるということ
を雄弁に物語っている。

「……よし」

周囲に他のモンスターの姿が無いことを確認してから、息を潜めて静かに忍び寄る。

ダイミヨウは砂地から湧き出ているとは思えないほど澄んだ水を口に含んではぎすぎすと人工的な色に染まった水を吐き出してオアシスの水を汚染することで頭の中が一杯のようである。こちらに気

付くような素振りはない。

その息遣いが聞こえそうなくらいまで近づくと背負った大剣を抜き、切り下ろしの為の大きく振りがぶった構えを取る。

ダイミヨウはまだ気付かない。そこから更に普段ではまず取らない極端な構え　ぐつと大きく背筋を反らし、切っ先が地面に付く位に肩から先をしならせる。

そして。

「　　ゝゝっおらああアアッ！！！！」

限界まで引き絞った筋肉に溜め込んだ力を解き放ち、無骨な鋼の爪を振り下ろした。

剣先はハサミの横、水に濡れててらてらと光る胴部分に食らい付くとその甲殻とその下の筋ばった肉を存分に味わいながら滑らかに進み、遂には地面を叩いた。

不意の一撃に仰天したか、ダイミヨウは口に含んだ水をびゅつと吹き出しながら震える叫びを上げた。

（刃が抜けたっ！　これならいけるか！？）

先ほどはクリーンヒットしながらも止められた一撃が、今度はスムーズに通り返けた。どうやら体の部位によって堅さに差異がある

らしい。

「ついでにつ、喰らつとけ！」

こちらへ振り向こうとするダイミヨウに先んじて、振り下ろした大剣を今度は脇に構えて薙ぎ払う。今度も切っ先は殻を切り裂き、合わせて十字の裂傷をその脇腹に刻み込んだ。

だが痛みを解さないのか、ダイミヨウは気にせずにくるりと振り向いて俺を正面に捉える。

「ちつ……鈍いのか我慢してんのか、表情が無いから判りやしねえ」

ギシイ、と短く鳴いたダイミヨウは左のハサミを振り上げ、巻き込むような打撃を繰り出す。

俺は同じ方向に飛ぶことでそれに対応し、更にさらけ出された顔を右上へ切り上げる。

今度は更に少ない抵抗で刃が抜け、飛び散った青い血がオアシスの縁に生えた雑草を染める。

そこから切り下ろし、切り上げと繋いだ所で、体勢を整えたダイミヨウが両のハサミをしならせて俺の体を抱き込むような動作をした。

「おっと！」

すかさずハサミの付け根の下に飛び込むようにしてぐり抜け、回避しながらダイミヨウの脇を取る。

前のめりの姿勢で硬直しながら空きになった脇腹へと一撃、ぎゃりん、と殻の割れる音を響かせながら血飛沫が舞う。

もう一発と切っ先を持ち上げたところで、振り払われたハサミが

刀身を直撃してこちらの体勢が崩される。

「うっ！」

剣を手放すミスはしなかったが、腕に走った衝撃にびりびりと痺れるような痛みを覚えて一歩後ずさる。

そこへ振り子のように戻つて来たハサミが襲い掛かり、胴具の上から痛烈な一撃を受けた。

「かつ……！」

攻撃を喰らいながらも何とか地を蹴って距離を稼ぐ。もう少し早く反応できていればダメージも軽減できたのだが、咄嗟にしてはぼちぼちの成果だ。

軽く咳き込みながらも、しっかりと立ち上がる。タメの不十分な一撃だったのだ。たいしたことはない。呼吸一つですぐに回復できる程度だ。

「どうやら、まだ毒の影響が残ってるみたいだな……！」

最初の遭遇時より明らかに動きが鈍っている。おかげでこちらの攻撃は楽に入るし回避も容易いものだ。

大剣を横溜めに構え直し、ダイミヨウの動きを待つ事なくこちらから突つ込む。

迎撃に振るわれたハサミをぐり抜けて一閃、さらに切り下ろしてその顔を青く染め上げる。だがそこで、

ギシィ、ギシャアアアアアアアッツツ！！

突然咆哮を上げたかと思うと一転して動きが変わった。

「っな!？」

先ほどまでとは比べものにならないほどの速度で振り払われたハサミをなんとかぐり抜ける。

その隙を付いて一撃を加えようと剣を振りかぶると、既に次のハサミが繰り出されていた。

「なっ……!？」

瞬時の判断で攻撃を中止し、剣を盾に受け止める。だがそれでも、その圧倒的な衝撃に体が背後に大きく弾かれた。

ふらつく足を気合いで押し止めてダイミヨウを観察すると、その口元からはぶくぶくと泡が吐き出されている。

「こいつ、キレやがったか！」

生命が危機に晒されたとき、或いは痛みや空腹でその感情が高ぶったとき、モンスターたちはその持てる力の全てを解き放つことで普段とは比べものにならないほどの身体能力を発揮する。

その状態のモンスターは狂ったかのように荒々しく、また手の付けようの無いほど目茶苦茶に暴れ回るのでハンターたちはそれを『怒り出す』や『キレる』というように表現する。

キレたモンスターは本当に今までと同じ奴なのかと疑いたくなるほどの驚異的な力を発揮するので、安全に戦いを進めるなら一度落ち着くまで逃げ回るのがよい。

まあ、逃げるのも一苦労だという話もあるが。

ダイミヨウは右のハサミだけを上げるとこちらに半身になるように体の向きを変え、そのままシャカシャカと猛烈なスピードで迫って来た。

「くっ……！」

真っ直ぐ向かってくるのに比べてスピードが早いのに加え、薙ぎ払う範囲が広いために回避が困難である。

ならば受け止めて凌ぎ、その後に反撃を　！
体の正面に大剣を立て、体重をかけて支える。そこへ、ぐんとい
際しなりを加えた一撃が与えられた。

ガギイイイン

！！

「おっ……！」

強打に大剣が悲鳴のような甲高い衝突音を奏でるが、それでも致命的な損傷も無くなんとかやり過ぎた。

砂の上を攻撃の余韻で横滑りしながらも、構えを防御から反撃の為のものに変える。

「ッはあっ……！」

脇腹に袈裟斬りを一つ入れるが、しかしそれ以上の追撃は許されずに敢え無く後退する。

その空間を戻って来たハサミが薙ぎ払い、風圧にぶわっと砂の力ーテンが舞い上がった。

「やっぱ、一筋縄じゃあいかなえな……！」

だが、前向きに解釈すれば全力を出さざるを得ない所まで追い詰めているとも言える。この調子なら意外と勝てる可能性も低くはないのかもしれない。

柄を握り直し再び懐へと潜り込む。的確に一撃を与え、立ち止まらずにそのまま反対側へと抜けていく。

「しっかしタフなやつだな、おい」

もう何回切り付けたことか。それでもダイミヨウは全く変わらぬ様子で足をシャカシャカと動かしてはそのハサミをぶんぶんと振り回してくる。

「せっかくのハサミなんだから、殴る以外の事もしてみろってんだ！」

後ろに退いてハサミをかわし、反対に大剣を振り上げる。だが、振り下ろされた刃は体まで届かずにその頑丈なハサミで受け止められた。

「ぐっ……！」

刃は浅くその甲殻にヒビをいれるがやはり切り裂くとまではいかず、その途中でぴたりと動きを止めた。

ダイミヨウはそのまま一歩分近づくと、大剣を受け止めたハサミをグンと押し出してくる。

「のあっ！」

鎧を含めても体重に数十倍の開きがある俺が押し勝てる筈もなく、呆気なく仰向けに倒される。

そこへ繰り出された、蠅でも叩き潰すかのような一撃。

「があああアツッ!」

「ごぎん、という鈍重な音が響く。すんでの所で大剣を間に挟んだが、そんなことは関係ないかのような痛烈な衝撃が体を襲った。

「ぐっ、うつうつッ……!」

激痛に縮こまる体に喝を入れ、何とか立ち上がって距離を置く。今のをまともに喰らってたら流石にやばかった。

「ちく、しょう……不、公平にも、程がある、ぞ……!」

咳き込むと血の混ざった痰がべちゃりと砂に落ちた。向こうはいくら喰らってもピンピンしてるのに、こっちは一撃で全身が軋みを上げてやがる……!

とにかく、正面から喰らったら一たまりもないということとはよく実感できた。向こうの攻撃手段はハサミだけなのだから、それに細心の注意を払って攻めていかない……

と、そこでダイミヨウは今までにない奇妙な動きを見せた。こちらを向いたまま顔を隠すかのようにハサミを交差させ、じりじりと間合いを詰めてくる。

「何だ……?」

よく分からないが、何らかの攻撃の予兆だろうか。警戒しながらも、大剣を構えてすぐに動けるように腰を落とす。

ダイミヨウはそのままハサミが届くまであと数歩の所まで来ると、そこで足を止めた。

「?」

そのまま迫ってくるかと思いきや何故か止まってしまったダイミヨウの姿を見て、訳が分からずこちらも硬直する。

次の瞬間、ダイミヨウがそのハサミを開いたかと思うと

「あ」

鉄製の鎧の胸元が碎け、生暖かい液体がそこから大量に飛び散った。

「~~~~~!」

そして俺は大きく後ろへと吹き飛び、一度地面に激突したところで意識を手放した。

。

……。

……まぶしい……。

……背中が熱い。顔がじりじり灼かれて鬱陶しい。

ベッドは朝日の当たらない場所に置いた筈なのに。

それに、何だか聞き慣れない音が聞こえる。まるで何かの遠吠えのような

「……つつー!!」

そこでようやく意識が覚醒し、同時に起き上がった瞬間

「っが、はあっ……！」

胸元に雷でも落ちたかのような凄まじい痛みが走り、びくりと体が跳ねる。肋骨がいくつかイッたようだ。

「けん、は……？」

手は何も掴んではない。どうやら吹き飛んだ際に大剣を手放してしまっただけらしい。

だがそれより、今の状況はどうなってやがるんだ？ 俺は一体どれだけの時間意識を飛ばしてたんだ？

それほど長い時間ではないと思うが、しかし一瞬というわけでもない筈。少なくともとどめを刺されてもおかしくないくらいの時間は寝ていただろう。

だが、俺はまだ生きている。それは何故だ？ それに

痛む胸を気遣いながら首を動かして周囲を窺うが、どこにもダイミョウの姿は無い。

死んだと勘違いして去ったという線はまず有り得ない。キレた状態のモンスターはそんな甘い判断はしない、体がバラバラになるまで徹底的に捌られるだろう。

なら何でここを離れたのか、考えられるケースはそう多くない。例えば途中で落ち着いて俺から興味を失ったとか、もしくは

気絶した俺を構っているよりもっと優先されるべき事態でも起きた、とか。

「くっ……？」

ふと、微かな音が聞こえた。小高く丘のように盛り上がった砂の向こう、ここからでは見えない場所。

「まさか……！」

胸を押さえながら立ち上がり、すぐ傍に転がっていた大剣を拾い上げる。それだけの動作で思わず苦鳴を上げるほどの鈍い痛みが走るが、それに構わず背中固定すると一歩ずつ歩き出す。

息も荒く、胸を庇って猫背になりながら丘を上がる。それに付れて雑音でしかなかった響きが鮮明に輪郭を得る。

「何を、してんだよ……」

小さな丘を上りきり、その景色を見下ろす。ダイミョウと何か赤いものが戦っているのが見えた。

「なんで来たんだよ、リエス　！」

弦を引き絞り、放つ。矢はハサミの間をすりぬけて殻に覆われた顔面に突き刺さり血飛沫を散らす。

だがダイミヨウは蚊に刺された程度も気にする事なく無造作に詰め寄りハサミを振るう。リエスはそれを後ろに一步引いてかわし、また矢をつがえてはダイミヨウに射かける。そうやってここまで誘導してきたのだろう。

普段は泰然とした笑みを貼付けているリエスが今は滝のような汗を流し、苦しそうに表情を曇らせている。抜けないダメージとモンスターへの恐怖でかなりの体力を消耗しているようだ。

違う、それだけじゃない。

リエスは少し離れたここからでも判るくらいに顔を真っ赤にして、呼吸の度に肩を上下させている。リエスがあれだけの疲労を見せているのを俺は見たことが無い。

「っ！」

そこで思い出したのは、ぼろぼろになったリエスのポーチ。確かあの中にはクーラードリンクも一緒に入れていたはず……。

となれば、今のリエスはその補助も無しにこの炎天下で強い緊張感の中動き回っていることになる。

……それは、自殺行為だ。

まだ一番暑くなる時間帯では無いとはいえ、際限無く熱を溜め込む鎧を纏ったまま日中の砂漠で活動していればあつという間に人体の持つ体温調節機能の限界を超え、下手をすれば命すら失いかねない。

実力に合ったモンスターを倒すのに必要な時間は平均して20分程だと言われるが、そんな長い時間戦っていることはまず不可能だろう。

と、こちらを振り向いたりエスと目が合った。

その苦しげな顔には濃い恐怖や疲労の色が見られた。が、リエスは僅かに下を向くと、ゆっくりと顔を上げ

強がっているのが見え見えの、下手な作り笑いを浮かべた。

『大丈夫だ』『怪我人は大人しくしてろ』とでも言うかのような弱々しい虚勢。

苦しいのはむしろそっちの筈なのに、リエスは俺を安心させようと無理に微笑んで見せた。

「……………全く」

こいつは、本当に。

「冗談じゃねえぞ、おい」

砕けた肋骨は正直泣き出したいくらいに痛むし、少し休んだせいで体はむしろずっしりと重い。

だが。リエスの姿を見てそんな事はどうでも良くなった。

「そいつは俺の獲物だぞ、リエス　！！」

走る。何の考えも無く、ただ大声を上げてダイミョウへと突っ込

んでいく。

リエスの方へと向かっていたダイミヨウは俺の叫びに反応したのか、突如その歩みを止めて俺へと振り返った。

「アंक！」

「おおおおおおっ！！！」

姿勢を低くただ足だけを前に出す。問題無い、十分戦える。

ギシャアアアアツツ！！

勢いの付いた所に払われたハサミは今からでは避けも受けも不可能。しかし、それならばいつその事

「おおおらあああッ！！！」

どん！ と地面を強く蹴り跳躍、更に眼前に迫ったハサミに足をかけ、更に高く飛びその上を越える！

……筈がバランスを崩し、ハサミに足をかけたところで膝が折れて前のめりにぐると回転する。

「あああああっ！？」

景色が凄い速さで上に流れていく中、俺は無我夢中で背の大剣を掴んだ。

とにかく、当たれ！

狙いも定めずとにかく適当に大剣を振り下ろす。すると何かを深

々と切り裂いた手応えと、大きな咆哮が響いた。

「っだあっ！ くそっ！」

それからうまく着地などできるはずもなく、不様に背中から砂の上に落ちた。それから急いで横に跳び、ダイミヨウの懷から逃れる。距離を置いてダイミヨウの姿を窺うと、顔面に縦一直線の巨大な傷が増えていた。

「また、いきなり無茶な動きを……」

横から掛けられた苦笑混じりの声。

「さっきまで情けなく伸びてたのに、急に動いて平気なの？」

「ここだけの話、俺の前世はゲリヨスらしくてな。死んだ振りなら俺の右に出る奴はいない」

軽口を叩きながら腰のポーチをまさぐり、クーラードリンクを取り出してリエスに渡す。

「とにかく、ありや俺のもんだ。最後のおいしい所だけ持っていこうとすんな」

「獣は追い詰めるほど危険が増すんだよ。アंकじゃちよいと頼りないから代わってあげようかと思ってね」

息を荒げ、膝に手をつきながらも、リエスはそんな強気な台詞を吐いた。

「……ったく、手間のかかる奴」

ようやく俺の知っている普段通りのリエスになったようだ。

「そりゃこつちの台詞だね。……っ」と

そんな事を言っている間に、口から血混じりの青い泡を吹き出しながらダイミヨウはハサミを交差させ、じりじりはこちらへ近付いて来る。

「まあ、とりあえず」

ぐいっとクーラードリンクを一息で飲み干し、リエスは矢筒から新たな矢を引き抜く。

「おう、やるか」

胸元に未練がましく残る鎧の残骸を引っぺがし、俺は片手で大剣を持ち上げて肩に担いだ。

ギシィィィィ……………

顔中からだらだらと血を流すダイミヨウは微妙な間合いでその足を止め、そして

「同じ手を喰うかつ!!」

開いたハサミの隙間から噴射された高圧の水流をかわし、一足で間合いを詰める。

さつきは不意を突かれたものの所詮は一発芸、何度も通用するよ
うな技では無い。

リエスもうまく回避したようで、水を吐き出し終えた所でダイミ
ヨウの顔面に新たな矢が突き立った。

「はあっ！」

振り下ろした刃は甲殻を易々と切り裂き、ぼろぼろになったその
表面の一部を吹き飛ばした。

ハサミの殴打を冷静に受け止めると、再び軽い音と共に矢が生え
て血が噴き出る。

リエスの矢は正確に殻の弱い所を打ち抜いているようで、放たれ
た矢は一本たりとも弾かれる事なく次々と突き刺さり、ヤドカ리를
ハリネズミに変えていく。

俺はいえばとにかく大剣の重さに任せて振り回し、当たったと
ころを破壊していく。

時たま背負った骨やハサミに阻まれるが、それでも気にせず大剣
を叩きつける。

そしてとうとうダイミヨウはその大きな体を揺らし、がくんと姿
勢を崩した。

それを好機と攻勢に出ようとしたが、ダイミヨウは分厚いハサミ
を盾にして丸まり防御　というより、もはや籠城といった具合だ
の体勢を取った。　リエスはそれを見ると弦につがえた矢を下
ろして息をつく。

「こうなったら手の出し様が無いな。少し様子を見よう」

背負った骨と重厚なハサミに全身を隠したその姿は巨大な岩を前にしたようで、まるで隙がなく見える。……だが

「……斬る」

「アंक？」

右腰に大剣を構え、不動の状態のダイミヨウを見据える。

「無駄だよ。こうなったらどこにも隙はないから、手を出しても武器を痛めるだけだ」

「いや、隙ならある」

ぐんつ、とまるで自分の背中を見ようとするかのように上体を捻り、横振りの反発力を溜める。

「確かに普通なら傷一つ付かない絶対防御なんだろうが、な」

限界まで力を蓄え、その放出先をじっと見据える。

「今は、でっかい亀裂が走ってやがるぜ　！」

みしり、と盛り上がった筋肉が軋みを上げ、そしてそのエネルギーを一気に解き放った。

持てる全ての力を込めた刃は左のハサミ　最初の一撃で浅く裂けた傷口を正確に捉える。

血の通わぬ鋼の牙はその傷を更に深くえぐり　そして遂には両断した。

「こいつで……！」

絶叫を上げて大量の血を噴き出すハサミを振り上げるダイミヨウを尻目に、振り切った大剣を肩に背負うようにして持ち上げる。

「……終わりだッ!!」

振り下ろした大剣は無防備な頭を深く切り裂き、二本の触覚の生えた眉間にまで深く埋まった。

ギシャアアア……!!

そして、ダイミヨウは最後に甲高い咆哮を上げ……それから、ゆっくりと崩れ落ちた。

13 一閃（後書き）

次回で一段落となります……………が、すみません。投稿は少し先になるかと思います。

連載開始時に8話まで書き上げておいたのですが、ここにきて遂にストックが切れました。というわけで、現在執筆中であります。

というわけで、暇潰しに3分で考えた小ネタをお楽しみ下さい。

くシャルダオラが倒せないく

気が付いたら同じクエばかりプレイ　そしていつも同じ流れで死ぬ

諦めずに硬い鱗に挑戦するけど　すぐに切れ味落ちるよ

毒投げナイフがあれば　楽に回りの風を消せるけど

何回やっても　何回やっても　クシャルダオラ倒せないよ

あの竜巻何回やっても避けれない

後ろに回って斬り続けても　いずれは脚に潰される

爆雷針も試してみたけど　自分で喰らっちゃ意味が無い

だから次は絶対勝つために　僕は秘薬だけは最後までとっておく

まあ閃光玉を調合分含めてフルに持って行ったら意外とあっさり倒せましたが（おい

しかし今度はガノトトスとディアブロスが倒せません。どうしろと。

終話 狩人の心得

さらさらと流れる川のせせらぎを前に、携帯用の折り畳み椅子に座りながらぼんやりと糸を垂らす。

天候は本日も晴天なり。

手元の竿には一向にアタリが来ないが、それでもどこか清々しい気持ちで水面を見つめる。

「ふわあぁ……………むう」

大きな欠伸を一つすると、包帯の巻かれた胸元がずきりと痛んだ。医者話に拠ると内臓に傷は無いが、三本ほどぼっきりと折れていたらしい。

綺麗な折れ方だったので安静にしていればすぐに治るとは言われたが、その翌日にこうして出歩いているのは問題だろうか。……ま、運動してるわけじゃないし平気だろ、多分。

流れに揺られてふらふらと浮き沈みするウキをぼーっと見ていると、不意にぴくりと深く沈んで波紋が一つ広がった。

「ん」

前のめりになってウキを見つめ、竿を握り直す。ウキはそれから何度かぴくぴくと浮き沈みを繰り返しては、微かな手応えを竿に伝えてくる。そして、

「つよ！」

がたん！ と立ち上がった際に倒れた椅子が音を立てる。力いっぱい竿を立てると、ぐぐぐつと強い抵抗を受けて竿がしなった。しかしそれも長くは続かずに、手応えが弱くなってきたかと思つた次の瞬間に水飛沫を上げながら水中から魚が飛び出してきた。穏やかに照り付ける日光を反射してきらりと光るその魚を地面に落ちる前にキャッチ。ぴちぴちと手元で跳ねるそれは丸々と太ったサシミウオである。

「お見事」

腰に吊しておいた蔦で編んだ魚籠ひくにそれを入れると、突如背後からそんな声が掛かった。

「よくここが分かったな」

「一度家の方にも行つただけだね」

川岸の小石の上をざくざく音を立てながら歩くりエスは、いつもの紅色の鎧ではなくラフな普段着姿。どちらも見慣れたものだが、この姿を見てハンターと分かる奴が果たしているだろうか。

体質的に日に焼けにくいのだろう、肌にはほんのりと白さが残り、その織腕は普段巨大な槍を振り回しているとは思えない。よく見ればそれが引き締まった筋肉に覆われていることが分かるだろうが、単なる村娘と言ってもすんなり通りそうだと、そこで違和に気付く。

「あれ？ 髪型変えたのか」

「ん。さつき村に物騒な鉄の爪を付けたアイルーが来たから追い出

そうとしたんだけど、それが必死に『ボクは美容師ニヤ！ 悪さをしに来たんじゃないニヤ！』なんていうもんだから試しに切ってもらった」

「……随分軽い理由だな、おい」

てつきり何か重大な心境の変化でもあったのかと思ったぞ。

解いたら背中程までありそうだった長髪はそこそ短く刈られ、流した前髪と少しサイドぎみに纏めた後ろ髪が特徴的な髪型に変わっている。確かキリンテール、とか言ったか。

「なかなかトリッキーな切り方だったけど腕は意外といいみたいだよ。せっかくだし後でアंकもやってもらえば？」

「……別にいいよ、興味ないし」

俺はといえばさばさの髪を邪魔にならない程度に適当に自分で切っているだけ。もちろんなにか決まった名前のある髪型ではない。リエスはそれを聞くと少し残念そうな表情を浮かべ、つままないの、などと抜かした。

「アंकも顔のパーツはそこそなんだから、手を加えれば結構イケてる感じになると思うんだけどな」

「知らん。別に誰に見せるでもないし、髪なんて邪魔にならなきゃそれでいいだろ。一々手入れすんのも面倒だし」

「ならボウズでいいじゃん」

「……………」

あれ、反論できない？

「……今一匹釣ったからボウズじゃないぞ」

ごまかしてみたが鼻先で軽くあしらわれた。……なんだこの敗北感。

「ま、それはともかく。大事はなさそうで良かったよ。どのくらいで治りそうだった？」

倒れていた椅子を直し、それに座りながらリエスは軽い口調で話す。

「季節が変わるまでには、だとさ。随分いい加減な診断だな……つか、怪我人を立たせんな」

「それを言うなら立っているのも辛いような怪我人が出歩くな、と」

「寝てるのは飽きたんだよ」

「まだ村に戻ってから一日も経ってないでしょうが」

全く、とりエスは口を尖らせる。その傍らで針に新しくミミズを付けると、手首のスナップを使って放り投げる。ちゃぼん、と涼やかな音を立ててミミズは着水。

それから二人並んで水面をぼんやりと眺めながらしばし時を過ごす。村の側とはいえまだまだ手の入っていない林が多く残っており、そのなかから時折鳥の囀りが聞こえてくる。

川の流から目を離して空を見上げれば、そこには小さな雲がゆつくりと流れている。先日の砂漠の地獄のような暑さが嘘のようだ。

「ああ、そういえば……」

「どうしたの？」

砂漠といえば一つ約束してたっけな。
視線をまた川に戻し、ぼそりと呟く。

「むかしむかし、あるところに一人の男の子がいました」

これから口にするのは取るに足らない小さな物語。

「リエスみたいな大活劇とはいかないけども……一応聞くか？」

その言葉にリエスは間を置かず、

「勿論」

短く簡潔に、されど興味津々といった響きを込めてそう返答した。

んじゃ、まあ軽く昔話でもしてみるか。

~~~~~

むかしむかし、あるところに一人の男の子がいました。

男の子は赤子の頃に両親に捨てられたいわゆる孤児で、その地方では見られない夜空と夕焼けの狭間のような暗い赤色の髪から、どこか遠くから来た旅人か何かの子供ではないかと思われました。

彼が捨てられたのは小さな村であり孤児院のようなものはなかった。たので、ある老夫婦のもとで育てられることになりました。

老夫婦はその男の子を我が子のように可愛がり、男の子もそれが実の両親ではないということを知りながらも二人を心から慕って育ちました。

男の子の背がすくすくと伸び始めてきた頃のある日、村に古龍が接近してきているとの知らせが入りました。

普段はモンスターの姿形もない平和な村でしたから、常駐するハンターなどいるはずありません。人々は村を捨て、近くの集落へと散り散りに移動しました。

男の子も老夫婦と一緒に荷物を背負い、少し離れた村へと移り住むこととなりました。

それから更に数年後、男の子が少年と呼ばれるようになった頃。移った村に再び龍の接近が告げられました。

村の人々はお金を出し合ってギルドに依頼しハンターを募りまし

たが撃退には及ばず、かえって龍を怒らせる結果となってしまうした。

急いで逃げ出したものの間に合わなかった人も多く、少年の面倒を見ていたおじいさんも混乱の中で足に怪我を負ってしまいました。

それでもなんとか街まで逃げ延びて数年。少年は成長して男らしいすっかりとした体つきになりました。

その頃には老夫婦もすっかり年老いて、出歩くのも一苦勞といった様子。

『今まで育ててもらった恩を返すためにも、これからは自分が頑張らないと』

少年はそう思い、朝から晩まで仕事を探しては二人の分まで精一杯働いて生活を支えました。

しかし、少年が行商の手伝いの仕事で街を離れていた時。またも現れた龍に襲われ、少年が住んでいた街は壊滅しました。

龍の力で起こされた嵐によって多くの建物が崩れ、飛来物によって怪我人が相当な人数出たそうです。

仕事の途中立ち寄った村でその話を聞くと、すぐに少年は廃墟と化した街へと駆け付けて家のあった場所へと向かいました。

しかし、そこにあったのは崩れた岩壁や材木の山。

そして、その下には……。

お爺さんとお婆さんは重なるようにして倒れていました。きっと足を悪くして動けなくなつたお爺さんをなんとか背負つて逃げようとしたのでしょう。

少年は冷たくなつた二人の骸を抱き、声を上げて泣きました。何の恩を返すことも出来ず、最後の時に側にいることすら出来なかつた。悲しみと涙が次々と溢れ出しました。

しかし。

そこへ突然、石が投げ付けられました。

一つや二つではありません。気付けば村に住んでいた人々が集まつて、少年の周りを囲んでいました。

少年は訳も分からずただ痛みに耐えて丸くなっていると、その上にたくさんの罵倒の声が降り注ぎました。

この疫病神！

お前さえ居なければこんな事にはならなかったんだ！

弟をかえせ、化け物！

『黒龍の忌子』め、くたばりやがれ！

どんどんとエスカレートしていく非難と暴行に、少年はその場から逃げ出すしかありませんでした。

身を寄せていた集落を続けて三度も古龍に襲われたという事実から、少年は災いを呼び寄せる存在として忌避されたのです。

あまつさえこの地方では珍しい暗い夕暮れ色の髪は邪悪な黒龍と流れる血を連想させ、さらに後ろ盾の無い孤児という立場がそれらの行為を助長しました。

気付けば少年の周りには一人として味方は無く、多くの見知った顔の敵と、何の関係も無い他人しか存在していませんでした。

育ての親と暮らす場所を失い、彼は三日三晩泣き続けました。それでも悲しみは消えませんでした。が、しかしいつまでもそうしてはいられません。一人で生きていくためにこれから何を考えなくてはならないのです。

彼は仕事を探しました。しかし、近くの街では噂が広まっているのか雇ってくれる所は無く、また受けることが出来ても報酬の僅か

な辛い仕事ばかりでした。

昼となく夜となく、道行く人はみな少年を見ると露骨に眉を潜め、わざと聞こえるように誹謗中傷を並べ立て、中には人目の無い場所に連れ込んで暴行を働く者もありました。

そんな生活の中、彼は色々な事を思いました。老夫婦とちゃんとした別れが出来なかったことへの後悔、身に降り掛かるいわれなき非難への憤怒、厳しい現在の状況への絶望。

それらの中でも1番強く、そして日々を過ごす中で次第に募っていくあるひとつの思い。それは恨み言や泣き言では無く、更なる悲しみを防がんとする意志でした。

『もし自分にもつと力があれば、おじさんもおばさんも、村や街の人達もみんな助けることができたのに！』

節くれだつた拳を握り、少年は堪えました。

今はまだ、金も体力も足りない。何かを得るには対価が必要なのだ。自分にはまだ何も無い。そう自分に言い聞かせながら。

そして数年後。更に成長して顔から子供らしさが抜け、日々の労働の中で基礎体力をつけた少年は、必死で貯めた金を握り締めて訓練所の門を叩いたのです。

~~~~~

「でまあ、そんなこんなで現在に至る、と」

話が終わっても、リエスはしばらく口を閉ざしたまま何も語らなかった。

俺としても特に同情や慰めの言葉が欲しくて話したわけではないのでそれに対して思うところもなく、ただ気まぐれに手元の竿をくいくいと動かしてみたりする。

「しかしまあ、今のところは人を救うどころか自分の命すら守れるかといった所だけだな。一流になりたい訳じゃねえけども、ちょっとそれは悔しいかね」

飛竜どころか蟹に殺されかけたしな、なんて冗談混じりに言っているとリエスはふと口を開いた。

「良いハンターの絶対条件は何か、分かる？」

「『良い』？ …… 一流とかじゃなくてか」

「そう。戦いの上手さやモンスターに関する知識とかじゃなくて、ハンターとして重要な項目」

一流なら簡単だ。経験や知識によってモンスターの生態を知り尽くし、その一挙一動に対して適切な対処を迅速かつ正確に行うことが出来ることだろう。

「依頼を確実にこなす、とか？」

ハンター業はクエストの受注によって成立する。そしてそのクエストは誰かからの依頼があつて始めて成立するのであり、失敗することはその人の頼みを叶えられなかったということである。

というわけで、これも結構いい線行つてると思ったのだが

「それじゃ60点かな」

「……なかなか厳しいな」

リエスは小石を拾うと、腕の力だけで鋭く投擲する。石は水面を2、3度跳ねると飛沫を上げて水の中へと沈んだ。

というか、遊ぶのはいいが向こうでやれ。魚が逃げるだろ。

「確かにターゲットの達成は重要だけど、無理をしてまでやるようなことでもないんだよ。目標は倒しましたが重傷を負って自分も力尽きました、じゃ意味がないでしょ。そんなことになったら関係者がみんな困っちゃう。」

依頼者とギルドは結果がどうなったのか分からないし、ひよつとしたら失敗したのかと勘違いしてもう存在しないモンスターを狩るために別のハンターが雇われるかもしれない。無駄ばかりが出来て、どうしようもない」

「リエスも昔そういうことになったことがあるのか？」

「あるよ。気合い入れて装備をバッチリ揃えて来たのに巣穴で竜の死体を見つけたときとか、もう思いつきりがつくりしたね」

あはは、とリエスは軽く笑う。しかし、想像するとなんか壮絶な光景だな。

「ま、というわけで心得その1。弱くても臆病でも、生きて帰ってくるのが良いハンターだ！　ってね」

「その2はあるのか？」

「ん？　そうだねえ……」

再び石を拾い、投げる。今度はパツパツと波紋を広げながら何度も跳ねていき、それなりの幅のある川を渡り切って向こう岸まで辿り着いた。

「おつ、やるな」

「当然。……まあ、思い付いたら追加してくとするよ」

「出任せかよ？」

「出任せだよ？」

そんな言葉を交わしながら二人して小さく笑う。

「ところでアंक、さっきからアタリが来てない？」

「は？　ってうお、マジだ！　おまえもうちよつと早く……ぬおっデカい！？　ちよつ、痛い痛い、力むと痛いっ！」

「全く、騒がしいなあ。ほれ、手を貸すよ」

一本の竿を二人で支え、姿の见えない水面下の魚と格闘する。
いつ終わるか分からないこんな日常だが、取りあえずもう暫くは
続けてみようと思う。

少なくとも、リエスの出任せな『^{ハンター}狩人の心得』のネタが尽きる位
までは。

「そこだ、フィーツシュ！」

「貰ったあー！　ってうお、逆光で見えな、っギャー！！　肋骨が
！　肋骨が折れたー！」

「もう折れてるでしょうが」

終話 狩人の心得（後書き）

なんという遅筆。この小説は間違いなく今までの流れを忘れられている。

というわけで随分と間が空きましたが、取りあえずこれにて一段落。またいくらか書き溜めたら別タイトルで連載を再開します。

当初はここで終わらせる予定だったのですが、気付けば伏線ばかりが大量に出来てしまい回収不能に（汗）

いつになるか分かりませんが、連載再開の際は宜しくお願いします。

つか、ダイミヨウザミで話を引っ張るのは辛かった。基本的にハサミで殴るしかありませんし。

原作内では砂中からの連続突き上げとか跳躍踏み付けなどの技もあります。が、実際あんな無理だろうということ。……やつてもよかったか？

なんにせよ、次はもっとメジャーな飛竜とかを出したいものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0229d/>

モンスターハンター = 狩人の心得 =

2010年10月8日15時07分発行